

歸命字訓信仰談

全

256

22

017587-000-5

特30-280

歸命字訓信仰談

藤谷 還由/著

M39.9

ABF-0379



歸命字訓信仰談

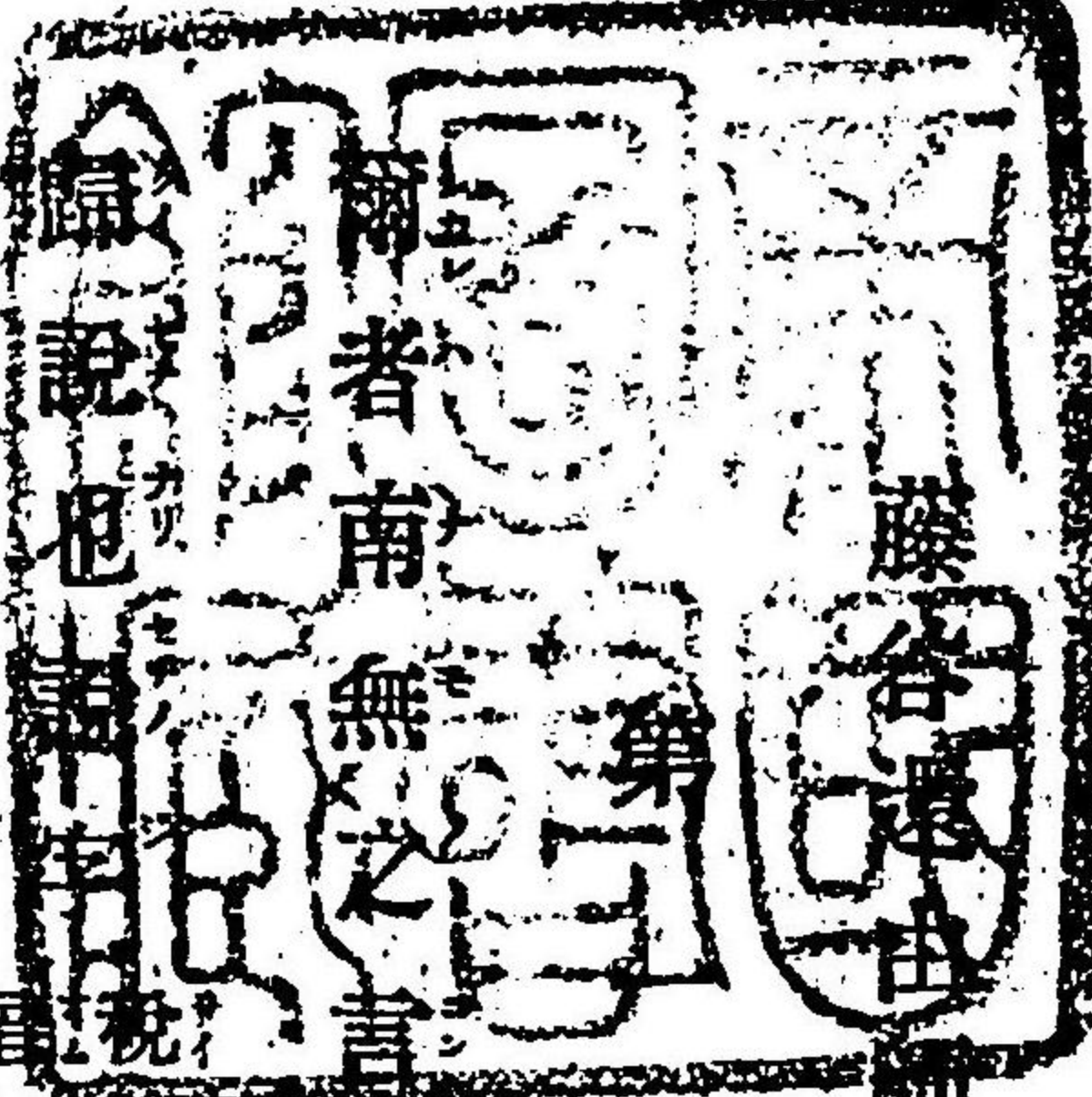
藤谷遷由師口演

選弘學舎生某速

治

39 9 25

内交



回

歸言至也

歸命歸言

至也又歸說也

說字

音悅又

說稅二音告也述也
也宣述人意也

命言

業也招引也使也
救也道也信也計

也召是以歸命者本願招喚之勅命也言發願廻

向者如來已發願廻施衆生行之心也言即是其

行者即選擇本願是也言必得往生者彰獲至不

歸命字訓信仰談

退位也。經言即得釋云。必定即言由聞願力光闡
 報土真因決定時尅之極促也。必言審也然也金剛
 心成就之貌也。

さて只今讚題に讀み供へたは世に名高き歸命の御字訓、淨土真宗に
 とりては特の外肝要な御化導である、全體淨土門では宗旨は幾個に
 分れやうが何れも南無阿彌陀佛を勧めぬ宗派はなひ、取分け旨と勸
 むるは淨土真宗である其故は念佛成佛是真宗とありて此念佛を御開
 山は行卷に念佛は則ち是南無阿彌陀佛と御轉釋あらせられた、ソ一
 して見れば念佛成佛と云は具に云へは南無阿彌陀佛成佛是真宗と云
 ふことになる、平易に云へは南無阿彌陀佛の御謂れて佛けになる宗

旨と云ふことちやで最も名號六字の謂を御懇ろに御示し下さるゝの
 である、ソコテ善導大師は六字の意を御釋なされて世に言南無者と
 尊むのであるが其言南無者が我々の様なものは中々判りかぬるで、
 我御開山が其言南無者を御釋下されたのが只今の歸命字訓釋である
 さすれば此歸命字訓の外に淨土真宗はないのちやで御前方も斯の御
 教通りの覺悟でないならば淨土真宗の御流れ汲みの同行とは云へぬ
 程に大切に聽聞致さねばならぬ。

先づ吾か開山は善導大師の言南無者を御一生の間に二度御釋なさ
 れて、第一に尊號眞像銘文第二に行卷である、銘文では文の上に彰
 はれた意を御教へ下された故、亦是發願廻向之義と云ふは二尊のめ
 しにしたかふて安樂淨土にむまれむとねかふことゝろなりこのたまへ

るなり」とありて、亦是の言も之義の文も皆な擧げさせられて言南無者の始終を具さに述べて下されたか、只今行卷ては言南無者の要義をのみ御釋なされた故、以斯義故の文などは釋してない、夫れ故銘文の御化導も有難か、只今の御釋は殊の外大切なる御化導故大に念を入れて聽聞せねはならぬ銘文ては歸命の二字を一として御釋なされたけれども、只今は歸と命と二つに分けて御字訓を以て御示しなされて歸の言に至也と仰せられた、至とは至ると云ふ文字で至ると云ふは行き處まで行たと云ふのか、至の字の意である、冬至夏至と云ふここに使ふ文字でありて、冬至と云ふは冬に至り着へたこと夏至よ云ふは夏に至り着へたと云ふことである、一體此至の字は會意の字と云ふて、一番上に一とて下に土と云ふ字を書て其中間に

の字がある、之れは上の一は天にかたどり下の土は地にかたどり、中間のムは鳥にかたどりたものぢや、鳥が上から降りて木の枝などに止まりて居るときは、若しや落ちはせぬか、危ふみもあれども、彼れが大地にまで降りて仕舞ふと最早や大丈夫心配かない、之れか至の字の意ぢや、即ち行き處まで行き着ひたことぢや、今至の字を歸に御使ひなされたは如何なる譯けかと云へは歸と云ふはかへると云假名か付く字でありて、還相廻向の還の字もかへると云ふ字なれども、意か違ふのぢや、還は行たり戻りたりする其時の還るに使ふ一度人間界から極樂へ参り極樂から衆生濟度に還りて來る其還へりて來るときは、もこの白凡夫かと云へはさうぢやない、御和讃に「安樂佛土に至る人五濁惡世にかへりては、釋迦牟尼佛の如く

にて利益有情はさわもなし」と御示しなされて釋迦の如く衆生濟度を
をして縁かつくれは極樂へ戻り亦た復た濟度に出ると云ふ、之れか
還の字の意ぢや、歸の字はさうぢやない、古人の言に此子此處に歸
くと云ふ此とつくと云ふ字か歸の字でありて、一度嫁入すると再び
其家から出戻らぬ若し出るときは死して出ると云ふ意味である、今
歸の字を至也と仰せられたは、或時は他方本願に歸し或時は自力に
戻ると云ふ様な歸し方ぢやない、一度他方本願に歸すれば二度と自
力へ戻らぬと云ふのか至の字の意である、十九二十の願にありたご
きは御念佛の稱へらるゝごきは之れで往生占めたと思御恩の程か長
忘れする様なごきは、之れでは往生如何やらご兎角信心か後ご戻り
するけれども、第十八願に歸すれば相た形ちに頓着せず今までは自

身で出離の大事に手を懸けたか、いよ／＼心底へ本願の理りか被ら
れ機の善惡に目をかけず、御粗末な心か見ゆるれば見ゆるほど愈々御
本願の尊さか知られ、斯る無善造惡の私を御救ひましますは何たる
廣大の御本願で御座るぞご餘行餘善に心をかけず、餘佛餘菩薩に思
へをめぐらさず、阿彌陀様一佛かたよりごなり力ごなりて下さるの
が本願に歸した相たである、程に心得誤りのなき様報謝の稱名相續
か肝要、

第二回

此至ると云ふに付て機より法に至ると法より機に至るとかありて、
之れは御和讃に「萬行諸善の小路より本願一實の大道に歸入しぬれ
ば、涅槃のさごりはすなはちひらくなり」と、仰せらるゝのか機よ

り法に至るのでありて、萬行諸善の小路よりある、萬行諸善とは
聖道八萬の法が攝まりてある、之れを小路と云ふは小道と云ふこと
である、大道と云ふは第十八願のこころや、御傳鈔にも萬行の小路
迷ひ易きによりて易行の大道に趣かんとなりと仰せられた、聖道門
の小路は迷ひ易ひのである、田圃道と云ふものは如何にも迷ひ易ひ
ものでありて、常に通る道でも迷ふことが折々あるものちや、聖道
門の修行は迷ひ道が多い故に之れを修すれば證りに至ると思ふて、
正しく道中をして見るこなきけなことが、始まるのちや、菩薩方
か一大阿僧祇の修行を終り二大阿僧祇の修行も今や成就するこ云ふ
一段になると法空無漏觀と云ふに入るのちや、するこ求むべき道も
なく、濟度すべき衆生もないと云ふ心が起る斯うなるこ大變である

全體菩薩の修行は何の爲めかと云へば三惡道へ墮つる衆生を助ける
に付て菩提を求め證りに至りて衆生を助けてやり度いと云ふのが、
修行の起りでありて、上求菩提下化衆生と云ふことちや、處か二大
阿僧祇も萬足する一段になりて、無漏觀に入ると野原へ出た如くて
菩提も衆生も見へぬ様になる、さうすると御氣の毒ちやが、二乘に
墮して仕舞ふのである、龍樹菩薩の易行品に二乘に墮すれば菩薩の
死と云ふてある、始めの中ならまだしもよいが、最早満足するこ云
ふ一段になりて墮するのちや、三大阿僧祇で佛になるこすれば、十
里の道は七里まで行きながら後と戻りをする之れが萬行の小路であ
りて迷ひ易い故、立派な菩薩方さへ仕損ふのである、況んや吾々は
智目行足の欠け果てたものである故、逆ても萬行の小路を歩くこ

が出来ぬ爾るに大道は如何であらふ、之れは歩み悪い處がないばかりぢやない、乞食で通れぬの金持で通れぬと、云ふ人を選びはない又大道の印しは夜る歩るいても晝歩るいても迷ふと云ふことはないのである、本願の大道も其如く菩薩の金持も無善造惡の貧乏人も人を選びはなく、正像末の三時の晝夜に隔てはなひ、又小路なれば馬車や人力車は通れぬけれども、本願の大道は弘願他力に乗りて通るここが出来る、そこが本願一實の大道である故に、無善造惡の吾々未來と足踏み出して見れば繋り處もなければ、たより處もない私か善智識の言の下てたのめば助かる御謂れと云ふこと、一つに疑ひ晴れ二心をく、彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なさしめて頂くのか全く第十八願の御手柄ちや程に、報謝の太行が何より

肝要

第三回

歸は至なりと云ふは前回に云ふ如く、至は至ると云ふ聞て行き處まで行き着いたことでありて、機より法に至ると法より機に至るとこの二つある、機より法に至ると云ふは御和讃に「萬行諸善の小路より本願一實の大道に歸入しぬれば、涅槃のさざりはすなはちひらくなり」とありて、吾々か十九願より二十願に入り二十願より第十八願に入るのか、機より法に至るのちや、動もすると二十の願は機より法に至るには入用なれども、十九の願は入らぬ誓ひの様に思ふ者があるけれども、之れは阿彌陀如來の大悲深重の御意より出たのであるぞ、喩へは一目の網で魚を取ることは出来ぬ、最も魚の係るは一

つが目なれども、澤山な目がなければならぬ如く、第十八願に於て諸行を捨て、念佛の一行を往生の因と定めてあれども、諸行を心に好んでつこめる者は中々第十八願に這入らぬ、そこで十九の願に諸行も往生の因にして、やらふと誓ふて十九の願に引き込んで夫れより二十の願に入り夫れから第十八願の網の目に係ける爲めてある、元來十九の願の行法は選捨の行と云ふて阿彌陀如來か因位に於いて選び御捨てなされた、行法である、夫れ故に第十八願では往生の因にはならぬぞと、捨てなから十九の願に於て再び取り上げて往生の因とする云ふことは、中々出来ぬことぢや、喩へは去狀を渡した女房を再び呼び戻す云ふことは出来ぬ、假令人か何と云ふても一度去狀を渡した限は男の意氣地として出来ることぢやなければ、本の

の通り呼び返へしたは何の爲めか云へば、我子を他人の手に懸けるのが可愛ければこそ、第十八願に於て選び捨てたる諸行を十九の願に再び取り戻しなされたは、諸行を好むものを助けてやり度いの大慈悲より諸行を往生の因となされたのぢや、して見れば十九の願の誓いは物ずきになされたのぢやない、吾々が三惡道へ墮つるのを見るに見兼ねて十九の願を御誓いなされたのである處が、釋迦如來は觀經に彌陀の思召を説き示されて上三品には大乘の善法を與へ、中三品には小乘及世善を授け、下三品の惡機は善根はなく、功德はなく、唯致作惡の者故に南無阿彌陀佛を御授けなされて、一聲稱ふる立處に八十億劫の生死の罪を除く御説きなされた、之れか十九の願より二十の願に引き込むのでありて、觀經に諸行と念佛とを説

て念佛は一聲で八十億劫の罪を除くところあるから、易行である故に諸行よりは、念佛を稱へる方が宣いと諸行をすて、念佛の一行を取るのか知らず覺へず十九の願より二十の願に入りたのちや、處が諸行より念佛が勝ると氣が付たけれども、未だ自力根性が取れぬ故に數多く稱へ度と云ふ心になる、すると二十の願には不果遂者の約束がありて終に第十八願に引き込まねば置かぬと云ふ仕掛がある、そこで何時の間にもやら名號の理りを被り度いと云ふ心が起り、いよく善智識の教への下で聞て見れば六ヶ布謂れがあるちやない、得叵い理りがあるちやない、たのめは助けふの御一言が心底へ被られた、有のまゝ、本願の約束通り二心なく、彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なさしめて頂くのが他方廻向の御手柄ちや程に、

報謝の大行か肝要、

第四回

前回に取次きた如く十九の願は第十八願に引き込む爲めの本願で、喩へは爲蓮故花と云ふて、蓮の花は實を結ぶ爲めに咲くと云ふことちや、之れを法に當て、云へは爲實施權と云ふことになる、阿彌陀如來か十九、二十、十八、の三願を御誓いなされた思召は十九の願の修諸功德の權を御誓いなされたは、第十八願の實に入らしむる爲めでありて十九の願の行法は花の如く、第十八願の念佛は實は直ぐに出來ぬ故諸行の花が出來て念佛の實を結ぶのちや、處が十九の願に於て初めは諸行も念佛も別段に違ふとは思はなかつたが釋迦如來の御教へによりて十九の願の諸行よりは、念佛が勝れると云ふこ

しか知れた故念佛の一行を取りたのか二十の願ぢや、そこで其二十の願は喩へは花開蓮現と云ふて十九の願の諸行の花が開いて念佛一行の實か顯はれた、之れを法て云へは開權顯實と云ふことになる十九願の諸行の權が開けて第十八願の念佛の實か顯はれたなれども、花瓣か未だ落ちぬのである、それ故念佛を稱へなから十遍よりは百遍百遍よりは千遍千遍よりは萬遍と數澤山に稱へ度いと思ふのぢや之れ十九願の自力の花瓣か取れぬ故である、在座の同行衆の中にも人の念佛を稱へるのを見て私は彼の様子に稱へられぬのが、未だ信心決定せぬのかと思へ、或は夜の寢覺めに何にも思ふて居らぬごきに念佛か顯はれると、只今までは御念佛か稱へられなかつたが今では直きに稱へる様になりた故之れでは往生占めたと思ふのが二十の願

ぢや、餘處のこぢやないを稱へられぬごきは往生如何と歎げき念佛の申さるゝ時は之れて往生占めたと云ふ心になるのか二十の願ぢや、處が第十八願は花落蓮城と云ふて最早や花か散りて仕舞ふて蓮の實ばかりになりた、之れを法て云へば廢權定實と云ふて自力の權を廢して他力の實が成立したのぢや、然れば第十八願は廢立爲正であるぞ、自力の花瓣か散りて他力の實はかりとなりて下された故口ばかりに稱へて居るのぢやない身口意の三業悉く六字になりて仕舞ふのぢや、只今までは出離の大事に手をかけて見たが、いよく善智識の教の下で頂て見れば二字も他力四字も他力で機法全く他力である故私の手前から持ら出すものは少しもない御粗末な心の中へ吾れをたのめ必ず救ふと呼て下さる御言葉に被らしめて頂いた有の儘

餘行餘善に心をかけず餘佛餘菩薩に思いを廻くらさず二心なく彌陀一佛をたのみ奉る、立處に往生の大事満足なさしめて頂くのか第十八願他方廻向の御手柄である程に喜びく報謝の代行か肝要、

第五回

歸の言は至なりと仰せらるゝに付て機より法に至ること云ふことは、前回までは話したから只今は法より機に至ること云ふことを取次きに及ふ、そこで法より機に至ること云ふは御和讃に「眞實信心いたりなばおほきに所聞を慶喜せん」と仰せられた時に、其機より法に至ること、法より機至ることは往くこ來ることの相違故一の至の字に二の意味かあることは同行衆にはちと合點の往かぬ廉もあらふかなれと、決して不審に處はない、如來の眞實か心へ届いて下された故私か第

十八願の誓いに叶ふ様になりたのちや、此十九二十の願の世話を離れて、第十八願に入ること云ふことは吾々の手はさで出來るのちやない、宿善の開發によるか故なりと、こゝろへてのちは吾があからにてはなかりけり、佛智他方のさづけによりて、本願の由來を存知するものなりと頂て見れば、義門の上で差別はありても被むる手前では決して違ひ目はなく二つはないのである、喩へは月の光りか私の目に映りたのが私が月を見たのちや、貰ふた光りて月の光りを見るので、月か私の目に映りたところが、法より機に至ること云ふのちや若しや私の手前で光りかなくても月を見ること云ふときには、暗夜に月を見るここか出來ねばならぬ處が、月夜であるから月を見る、して見れば月の光りて見るのちや、今眞實信心いたりなばこは眞實信

心は行者彌陀をたのむ心で彼方から來たのちや、それが能歸の心となりた、彼方から來た故いたりなはと仰せられた、私は月を見れども其月を見る光りは彼方から貰ふたのちや、月の相たを拜む目の光りは月より至りたのちや、彌陀をたのむは眞實の信心でありて、能歸の手前は私なれども其信心は佛智他力のさつけてある、決して道理を屈を并へ立て、之れて參るあれで參ると信じ心やたのみ心を差出すのちやない、頂た儘か彌陀一佛をたのみ奉る心ちや、親を慕ふは子供なれども、慕ふ心は子を可愛と云ふ親の眞心が届た印しちやで、親より貰ふた心其心で親を慕ふ、其慕ふ心が親心の届たのちやたのむは私なれども阿彌陀如來のたのむものを助るの御まこと心か届た儘か私の信心御助けが其ま、たのむ心ちや、御助けは法たのむ

は機阿彌陀如來の御助けの法が機に至りた儘か彌陀一佛をたのむのちや、鐘か鳴りたは如何して鳴つた撞木か當りて鳴つたのであらふ撞木か當らすに鳴るものなら、何時でも鳴らねはならぬけれども、ゴンと鳴つた鐘なれども鳴せたは撞木ちや、たのむ心の音色の出したのは御助の撞木か當りた故ちや、何時でも信ぜらる、筈ちやが、蓮如上人は宿善開發の時節到來と仰せられたはたのめ助けふの撞木の當り時ちやたのむは私、たのませたは勅命の撞木ちや、撞木か鐘に至りた儘か鳴るのちや、たのめ助けふの仰せの届いた其儘か、たのまれた故たのんて助けに預るのちやない、たのむ心が其ま、御助けである、爾れは無善造惡の私か彌陀一佛をたのみ奉る、立處に往生の大事満足するは私の所爲ちやない、全く他力廻向の御手柄ちや程

に報謝の大作が肝要、

第六回

歸は至なりとは第十八願には至心と誓い觀經には至誠心と御説きなされて、彌陀の眞實を顯すに至字を御用ひなさるゝは、至は至極と云ふて物のおんづまりと云ふことである、吾々にまことはないぢやない、あるに違はなければとも末へ永く通るまことぢやばい、向ふ相對によりて中半で折れるものぢや、喩へば親子の間に於ても、親子に向ふてまことを、つくしても子供の手前に夫れを受けぬときは終に恨む様になるが、阿彌陀如來の御まことは至極でありて狂ふ氣つかいがないのである、吾々のまことは砂地に棒を立てた様で倒れてならぬものぢや之れを倒さぬ様にすることは、控繩を用ひねはな

らぬと同じことで主人に忠義をつくさうと思ふても主人か何とも思はぬときは、忠義が出来ぬ様になる、そこで主人が臣に忠義をさすときは、臣を慰れむと云ふ控繩がなければ忠義が立たぬ、夫婦の間に於ても女房が夫に貞節を盡さうと思ふても、夫か女房を愛すること云ふ控繩がなくては貞節が立たぬ夫れはなせと云ふに、煩惱の砂地に立てた故ぢや、阿彌陀如來の御まことはさうぢやない、一切衆生か今日まで煩惱の波風を以て向ふても崩れもせず、邪見を以て向ふても狂ふ氣つかいがかい、夫れは邪見と云ふに阿彌陀如來の御まことは無漏清淨の願心の大地より生へ拔きの御まことである故ぢや假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔、と毒の中も御厭いなく炎の中も御厭なく、一念一刹那も清淨ならさるなく、眞實ならさるなく、

髪切る衆生可愛の御心が止まなかつたごある、此御まことが御粗末な私の心の中へ至り届いて下された故、昨日今日只今まで三塗へ影身のさす様な私か二心なく彌陀一佛をたのみ奉る、立處に往生の大・事満足なさしめて頂くのか全く彌陀如來の御まことの至り届いて下されたのである程に、報謝の不行か肝要、

第七回

法藏菩薩が世自在王佛の御下に於て、衆生を助け救はんか爲めて四十八願を御建てなされ夫れを満足する爲めに御苦勞なされた其有様を大經の勝行段に少欲知足無染恚癡三昧常寂智慧無礙無有虚偽諂曲之心和顔愛語先意承問と、御説きなされてある、少欲知足とは、欲を少ふして足ることを知ると云ふことちや、吾々なれば財産を作り

て飽き足りかない、灰吹きと金持ちは溜れは汚たない云ふて段々ご欲か増もて來るものちや、處が夫れ位にして假令へ思ふ通りに財産か出來ても千年萬年夫れを樂むと云ふことは出來ぬのちや、釋迦如來は一芭蕉は實を生して枯る、欲煩惱も亦爾り一等と説れた、芭蕉と云ふものは實か出來ると枯れて仕舞ふ、貪欲の煩惱は一生懸命財産を殖やして人に金持ちと云はれるごきが死ぬごきちや、貪欲の煩惱で人に悪く云はれても、頓着せず人間中間へも入るごこの出來ぬ畜生同様と云はれても何て身體に毛か生へねは夫れて宜いと云ふて人に何と云はれても構はず、爪の上に火を灯す様にして財産を拵へても出來たごきか死ぬごきちや、又煩惱に追ひ使はれて金の出來るのを喜んで身不相應に働いて體を傷めて命を縮めると云ふことは

世間に随分あることで餘り烈しく働いて、命まで縮める何んぞ損な
 咄ちやないか、法藏菩薩はさうぢやないぞ、少欲知足である、無染
 恚癡云ふは三毒の煩惱のないこと三昧常寂云ふは心が静かなこ
 こぢや、吾々なれば體か止りてありて心か煩惱で働き續けてある、
 阿彌陀如來はさうぢやない、心を静かになされたことぢや、智慧無
 礙云ふは物事の理に向ふても明な云ふこと、無有虚偽諂曲之心
 こはウソ偽り曲り、くねりした心かない云ふこと、和顔愛語云
 ふは他人に向ふても顔を和にしてやさしい言を使ふ云ふこと、先
 意承問こは、已が希を後こにして向ふの望みを先きにするこことあ
 る、吾々なれば人のこことは後廻はしにして自身のこことを先きにする
 假令人を蹴倒してなりとも、自身のこことを先きになさうとする、一

幹の家に於ても嫁と姑この中の悪いのは、自身のこことを先きに立て
 やうとするからぢや、之れか嫁が帯かほしいときは姑の着物を先き
 にするこか、姑が着物を拵へるときは嫁の帯を先きにするこ云ふ様
 になれば一家内が圓滑に納まるものぢや、阿彌陀如來は御自身のこ
 こは後こに廻はし衆生の望みを先きになされるのぢや、四十八願を
 頂て見れば悉く衆生の往生を先きになされてある、蓮如上人は御文
 に「阿彌陀如來の昔し法藏比丘たりしとき、衆生佛にならずば吾れ
 も正覺ならじと誓いいたしますとき其願すてに成就し玉いし、相たこ
 そ今の南無阿彌陀佛なりと」仰せられた、爾れは阿彌陀如來の五劫
 兆載永劫の御苦勞は御自身の爲めぢやない、私一人の爲めに永古の
 間御苦勞なし下され其眞實一杯か吾れをたのため必ず救ふの御一言て

ある、此御まことか私の心の中へ被られて見れば、斯る無善造惡の私を本と御救いしますは、彌陀如來の本願はかりなりと餘行餘善に心をかけず、餘佛餘菩薩に思へをめぐらさす後生御助け候へと彌陀一佛をたのみ奉る、立處に往生の大事満足なさしめて頂くは偏へに他力廻向の御手柄である先づ、

第八回

歸悅歸稅

前回までに歸は至也とある、思召を略して辨した只今は歸說也又歸說也とある、思召の程を御取次きに及ふことぢや、そこで古來歸命には十三訓あると申し傳へて歸の字に五訓命の字に八訓と申すけれどもさうぢやない、歸の字に五訓あると云ふ譯けはない、此歸の字は一訓二熟と云ふて歸は至也とあるか字訓でありて、歸說也又歸說

也とあるは熟字と云ふものぢや、又告也述也とあるは古來普通の字訓に數へ入るゝけれども、之れは孫訓と申すものぢや那是なれば告也述也とは歸の字の訓ぢやない說の字に付ての訓でありて稅も稅も說の字である、處か說の字に付ていつと云ふ讀み方になればヨリタノムと云ふ意味がありさいと云ふ讀み方になればヨリカ、ルと云ふ意か顯はるゝそこていつも、さいも、元の音は説である、其說に告也述也の訓が出る之れか孫訓と云ふものぢや、夫れ故古來歸の字に五訓ありと云へとも、一訓二熟と云ふものぢや、そこて此歸說也又歸說也の熟字を出すは如何なる譯けかと云ふことを、一寸申して置くが訓と熟字の差別は割註と大字との差別がある、さて此熟字は熟字の必要ぢやない、御左訓か肝要である、之れは那是と云ふに三國

轉翻てんぱんして天竺てんしゆくでは南無なむ唐土たうどには歸命きめい吾日本わがくにほんではヨリタノムヨリカ、ルことにて、此御左訓このごさくんを御擧ごたかげなさるに付つて、御聖教ごしやうきやうは漢文かんぶん故此和語このわごの當あて箱はこする漢字かんじを出ださねはならぬ、そこで熟字じゆくじの入用いりようになりて來たのちや、さて其ヨリタノムヨリカ、ルこと云ふは吾々われわれふ二心ふたこころなく、彌陀みだ一佛いつぶつをたのみ奉たてまつる心は本願ほんがんにヨリモタレ本願ほんがんをタヨリ力ちからにすることであること、顯あらわはす爲ためめにヨリタノムヨリカ、ルこと仰おほせらるゝのちや、今本願いまほんがんによりもたるゝこと云ふは、本願ほんがんの約束やくそく通り本願ほんがんによりもたるゝのちや、動うごもするご自身ごじしんが喜よろこんで稱なまへて極樂ごくらくへ往いくつもりものの者ものがあるけれども、夫おとれではよりもたれたのちやない、參まることは出來でるのである、吾々われわれは相あから云いふても心こころを調たのへて見みても次生じしやうは極樂處ごくらくじよが二度ふたたびご人間界にんげんかいにさへ顔出かほだしの出來でぬ様ような、御粗末ごそまつなものか

此度このたび彌勒みらく菩薩ぼさつの先ま駆がけをなさしめて頂いたくは本願ほんがんによりもたれた故ゆゑである、逆さかても三塗さんず離はなれて他たに行方ゆきかたのない私わたくしかためは助たすかる御謂ごいれこと云ふこと、一つに夜明よあけをさして頂いたき二心ふたこころなく、彌陀みだ一佛いつぶつをたのみ奉たてまつる立處たてまちに往生おんじやうの大事だいじ満足まんぞくなさしめて頂いたくのか偏ひとへに他方たうほう回向けきやうの御手ごて柄がらである故ゆゑ、報謝ほうしゃの稱名しょうな相續さうじゆくが肝要かんやうである、

第九回 其二

歸悅きえつ也なりの悅よろこは悅服えつぷくの義ぎて心底しんぞこから本願ほんがんによりもたれ順したがふことちや、同じ順おなじ順したがふことゆふても、只首ただくびを下くだげるにも義理ぎりづくで止とむを得えずともふのちやない、心底しんぞこから御慈悲ごひじの程ほどが蒙かまれ萬劫まんげつの初事しよじに永世えいせいの間あひだ案あんじ煩わづらふた後生ごしやうの一大事だいだいじに心配しんぱを取りて頂いたくとは何なんたる廣大くわうだいなごこと、本願ほんがんに順したがふが悅服えつぷくの義ぎである、其有様そのありさまを御左訓ごさくんによりたのむご仰おほ

せられた、そこてたのむごゆふことは殊の外大切なことて吾御開山のたのむ一念の處肝要ご御教へ下されたけれども、其たのみ鹽梅が解り兼ねてありた故、蓮如上人は八十通の御文を御作りなされて雑行すて、後生助け玉へご一心に彌陀をたのめご委しく御教へ下された、そこてたのむご云ふは何の爲めかご云へは次生人間界や天上界に生れ度いごたのむのぢやない、浄土へ往生遂げ度いと彌陀をたのむのぢやで、後生助け玉へご彌陀をたのめご仰せらるゝのぢや、處か此助けたまへご云ふに付ていろゝの異解者かありて、助け玉へを六字に配當して助けた阿彌陀佛の四字たまへご云ふは、南無の二字であるなごご途方もないことを傳へる者かある、夫れは決して當流になきことぢや、蓮如上人は六字の謂れを御示しなさるゝごきに

只助けたまへごは仰せられぬ、南無の二字を御釋なされて歸命ご云ふは衆生の阿彌陀佛後生助けたまへごたのみ奉るごゝろぢやご、仰せらるゝして見れば助けたまへご云ふは行者彌陀をたのむごゝろ即ち南無の二字のごゝろか助け玉へご彌陀をたのむのぢやで、助けご云ふは四字たまへご云ふは二字なごゝ分けるごは出来ぬ、之れを二字四字に分けるのはつまり御助けは彌陀たのむは行者ご二字ご四字ご何時も分けて居るから、助けは彌陀たのむは行者ごなるのでありて決してそうぢやない、佛勅印現ご云ふて彌陀の勅命か印の如く其印か行者の心の中へ顯はれたのか、助けたまへごなる、版木に日本一ごあれは袋に押すと日本一ご顯はれる、彌陀のたのむものを助くるの勅命か心に押して下されたまゝか後生助けたまへご彌陀をた

のむのちや、處か助けが四字玉へが二字と區別をして居れば法は何も法で彼方も法行者の手前も法と云ふやうに法か何時までも法なれば浄土へ參ることは出来ぬ、善智識の手前の法を行者か授りた其儘機となるのちや、夫れ故最要鈔に信心をはまことのこゝろこよむうへは凡夫の迷心にあらず、まつたく佛心なり、この佛心を凡夫にさづけたまふとき、信心と云はるゝなりと仰せられて彼方は佛心夫れか行者へ被りた、其まゝか信心である、そこで助けと云ふは四字と何時までも取り切りて置けは法も佛心行者の手前も佛心となる、それでは違ふ授くるの一言が佛心の名が轉して信心となる、行者の心へ佛心の貫はれたのが信心故佛心が行者へ移りたまゝが、信心である、先輩圓乘院師は御助けはたのむ心、たのむこゝろが御助けと

申されたは此處ちや、私の後生助けたまへ、彌陀をたのむ外に御助けはない、たのむは私信するも私なれども、露聊も自力はより添はぬ全く他方回向である故に、疑い深い此身はからい多く私か宿善到來して本願の御理りを信する身になり、往生は一定御助けは治定の了解覺悟になさしめ貰ふは偏へた他方回向の御手柄ちやほごに、報謝の大行か要肝、

第十回 其三

後生助けたまへと云ふことは、浄土真宗に限らず西山鎮西も共に後生助け玉へと云ふことは、同じでありて、言の上は違はぬけれども品柄か違ふのである、第十八願に當て見るこ西山鎮西の助け玉へは欲生我國に當り吾浄土真宗は信樂に當るのちや、然らば吾真宗にあり

て欲生我國は如何なる扱ひになるのかと云へは大悲回向でありて、阿陀彌如來の招喚か欲生我國である、夫れ故に御當流にありては、助け玉へは欲生我國にあたらぬ信樂に當るのぢや、此信樂と云ふは則是如來満足大悲圓融無導信心海とある、欲生は則是如來招喚諸有群生之勅命とある、爾れは欲生は彌陀の呼聲である、處が助け玉へと云ふは欲生我國なれば行者能歸の信相ぢやない、能歸の信相と云ふは受け手前でありて、それが助け玉へである、之れを第十八願に當つれば信樂である、此信樂を云ふは疑蓋無有間雜と仰せられて疑の蓋の雜らぬことで疑ふと云ふは第十七願を疑ふこと蓋と云ふは教に蓋をしたのぢや、鏡に蓋をすれば少しも物は映らぬけれども蓋を取除けば映さうと思ふ物品が映るのぢや、吾々の

心の中に疑の蓋をして居れば第十七願の顔か映らぬのである、第十七願の理りたのむものを助け玉の顔か第十八願の鏡に映りたのか助け玉へてある、夫れを助け玉は第十七願玉へは私と云ふことはならぬ鏡に映りたはすれは皆残らす映らねはならぬ、半分映りて半分映らぬと云ふ釋けはない、白髮の老婆を鏡に映せば其映りた相は矢張り白髮の老婆である、半分は老婆なれども、半分は若い娘ぢやと云ふ映り様はない、爾るに助け玉は四字でたまへが二字と云へは半分は映りて半分は映らぬと云ふに同じことぢや、夫れで不可助け玉へは佛勅印現して心へ映りた儘か後生助けたまへと、彌陀をたのむので自力心は少しもより添ふのぢやない、吾れをたのめ必ず救ふの仰せのまゝか御粗末な心へ届いて下された故はからひ多い私疑い深い私

か餘行餘善に心をかけず、餘佛餘菩薩に思いをめぐらす後生御助け候へと彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生一定御助け治定の覺悟になさしめて頂たは偏へに他方回向の御手柄ちや程に報謝の太行か何より肝要、

第十一回 其 四

たのむと云ふは先づ言の起りは米のことである、米は田の實であるみと云ふもむと云ふも通音ちやで同じことである、米の出来るものをいねと云ふがあれは命の根と云ふことて人間一生は米をたより力にするもので米が無くては何とも仕方のないものちや、そこてたのみ力にするものをたのみと云ふのちや、今吾々が無量壽の命をつなかして頂くには何をたより力にするかと云へは、南無阿彌陀佛の六

字の米をたよりにするので阿彌陀如來の本願を力にして、今日は無量壽の命を持つ様となりた故に、たのむと云ふのちや處で吾々共がたのみにする處が他にあるかと云へは中々如何して未來と足踏み出して見ればたより力になるものは少しもない、諸佛に向ふて未來は如何で御坐ると尋ねて見れば惡人助けふ女人救ふと云ふて下さらぬ私の手前を調べて見れば善根はなく、功德はなく五十年の後をふり觀れば心に残りて居るものは何てあらふか、若い時分には斯ふくして人に迷惑を掛けたことが親に心配を掛けたか、云ふ様な御粗末なことはかり残りて居てこれこそ善根であること云ふことは少しも自身の心に残りて居らぬであらふ、して見ればたのむへき諸佛はななく力にする善根功德とはなく、何んぞ考へても未來は三塗の外に

行方のない私此處に於て吾れをたのみ必ず救ふと呼で下さるは本願
 招喚の勅命より他にないのである、御開山の兄弟子に聖覺法印と云
 ふ御方がありて唯信鈔と云ふ御聖教を御書きなされた、此御聖教は
 如何にも有難い御聖教でありて、御開山も殊の外大切に思召されて
 未々の同行に心得易く知らせ度いと思召から唯信鈔文意を御書き下
 された、此唯信鈔に吾々が彌陀如來をたのみ奉る肌合を一つの諭へ
 を以て御教へ下されて山の峯から繩を下げてサア之れに繋がれ引き
 上げると呼ふものがある、下の谷底に居る者は峯へ登り度いと思へ
 とも足場とする岩角はなく、繋がるつたかつらはなく、迎ても昇る
 ことの出来ぬ處へ峯より繩をさげた時は其繩が強いが弱いかと思ふ
 て繋からぬときは昇ることは出来ぬ、弱からふと思ふたごとて弱くな

るでもなく、強いと思ふたごとて強くなるでもない、繩の強弱は向ふ
 にある故に峯へ引き上げると呼て呉れたら其言の如く、繋がれば峯
 へ昇ることが出来るのちや、其心持ちかたのむと云ことちやとある
 此御諭へは峯とあるは第十七願繩と云ふたは南無阿彌陀佛の六字繋
 れと呼て呉されたは、善智識の教へてある、極樂最下の谷底へ墮ち
 込んだ吾々修行戒行の岩角はなく、善根功德のつた、かつらはな
 く、何と工夫して見ても出離の望みは遂げるここが出来ぬ、爾るに
 此南無阿彌陀佛で助かるか助からぬかと思ふて居ては涅槃の證りに
 至るここが出来ぬ、南無阿彌陀佛が弱いと思ふて弱くあるでもなく
 強いと思ふたごとて強くなるでもない、強い弱いは向ふ様にあるちや
 で、善智識の教通りたのめば助かるに間違かない、蓮如上人は何の

やうもなく、阿彌陀如來の御袖にすがり参らする思いをなしてと仰せられた、未來は三塗の外に行き處のない私に吾れをたのめ必ず救ふと呼て下さる御意一言被られた、有の儘餘行餘善に心をかけず餘佛餘菩薩に思いをめぐらさず、後生御助け候へと彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なさしめて頂くは他方廻向の御手柄である先つ、

第十二回

其五

歸に二熟ある中既に歸悦のことは、前回までに略辨したが、さてこれより歸稅の義を御取次に及ぶ、此歸稅の御左訓に「ヨリカ、ル」ごありて「ヨリカ、ル」ご云ふは乗托の義で、舟に乗た心持ちである、龍樹菩薩は易行品に難行道は陸を歩むか如く、易行道は舟に乗

るか如しと仰せられた、そこで其乗と云ふ縁合は云何なるものかご云ふに已か働きを用立てず、向ふの力で進むのか乗ると云ふものもある、陸を歩るくごきは足の丈夫なものは、先きに進み足の弱い者は後へ遅れねはならぬ、此道理から推して見れば、足の丈夫な者が乗りた舟は先きに進み、足の弱い者が乗りた舟は遅れねはならぬけれども、舟に乗れば差別はない足の強い者も弱い者も同じ事に進むのでありて、陸には足の強弱の差別があれども、舟に乗れば差別のないのは、陸を歩むごきは各自の足を間に合はず故、遅速がある、けれども舟に乗る者は各自の力を用立てず舟の力で進むからちや、法然上人は弘誓の舟に乗れぬものと乗る者ごを御示しなされて、乗れぬ者が二人、乗る者が二人ある、其乗れぬ者二人は善人と惡人と

あるご仰せられた、夫れは云何なる譯けか云ふに善人は善をたのみにして乗らす、悪人は悪を恐れて乗らぬ、乗る者二人とは之れも善人と悪人である、夫れは那是云ふに善あり云へともたのむにたらず、本願に勝る善なきか故に悪あり云へとも恐るにたらず、本願をさまたぐる程の悪なきか故に云へともある、爾れは善もたのます、悪をも恐れぬ之れか第十八願の舟に乗りたのでありて、相た形ちに順着は入らぬ此度往生遂げ奉るは、己か稱へた手柄で参るぢやない、善智識の御化導の下で吾れをたのため必ず救ふの一言被らせて頂き二心なく彌陀一佛をたのみ奉る、立處に南も無きも口に露はさぬ先きに往生の大事満足するのである、若し聖道門の修行なれば彌勒菩薩の様な修行戒行の足の達者な御方は先きて吾々の様な智目行

足の欠け果てたものはい一寸も前へ進むことは出来ず、地獄は一定住家ならぬはならぬ其處へ「彌陀觀音大勢至大願の舟に乗してぞ、生死の海に浮みつゝ有情をよばふて乗せたまふ」とありて、生死の海に浮きつ沈みつして居る其處へ「さあ乗れよ」とある仰せか聞へた心持ちは云何であらふ、未來は三塗はないて行き方のない私に阿彌陀如來の仰せられける様は、末代の凡夫罪業の吾等たらん者罪はいかほご深くとも吾れを一心にたのまん衆生必ず救ふへし、ごある仰せ一言被られて見れば、かゝるときはいよく阿彌陀佛ごふかくだのみまいらせて極樂に往生すへしごおもひこりて、一向一心に彌陀をたふごさごさうたかふころつちあちりほごも、もつまごさごごなし、ごあるからは本願名號の御理りにむつと繼り奉り、二心

なく彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なまじめて頂くは
全く他力廻向の御手柄である先づ、

第十三回 其 五

歸稅也云ふは御開山はヨリカ、リと御左訓を御附けなされた、之
れは如何なることか云ふに歸稅とは舍息の義て宿り所か出來たこ
云ふことぢや、總て人間は何者に限らず據がなくては成り立たぬも
のでありて喩へは戸障子なれば敷居鴨居を據にして立て居る如く、
人間なれば五十年の間財産を力にして心安く日を送るものもあれば
或は智識や學問を據にして居る者もあり、又智識もなく、財産もな
いものは家内眷屬互に力に仕合ひをして居るもので女房か夫を力に
し夫は妻をたよりにする云ふ様に家内の者が互にたよりにして居

る處か之れ等は此五尺の體の在る間のことて、身體を取りて仕舞へ
ばたより所も何にもない、未來に足ふみ出して見ると何かたよりに
なるのであらうか能く考へて見られよ何とも思はずに居れば何ても
ないやうであるが、いよく魂に無常の草鞋を履かせて見ると善根
もなければ功德もない故に、未來の旅立ちか出來ぬ何かたより力に
する品物かなければならぬのである、處か三惡道へ行く處の惡業煩
惱は澤山あるけれども、善根功德はなくなるとより處云ふては露聊も
ない、して見れば靜止しては居られぬのである、私も若い時分に九
洲に書生をして居たが懷中に金のないごきに道中をしたことがある
誠に心配なものぢや、向ふに立派な門構への家があるから何かか
して今夜は泊めて貰い度いと思ふて愈々其家の立關に立つて案内を乞

ふて何卒泊めて呉れと云ふことは中々口へ出ぬものであるけれども強いて話して見るに向ふの答へるには夫れは如何にも氣の毒であるが、今晚は少し都合が悪くて御泊め申すことは出来ぬと、云はれたときは何とも仕様がなないものである、又二十四輩などが拙者の寺に能く泊まることがあるから、夫れ等に夜分の宿のことを聞いて見ると朝飯前だけは宿の心配はないか、午前十時頃からそろ／＼宿のここか心配になりて今晚は何處に泊めて貰ふかといろ／＼心配はすれども、宿を求められぬことが澤山あると云ふて居る夫れに違ひない旅費があれば宿の心配もなけねども、旅費がなければ實に迷惑なものぢや、若ひ時分に國に於て身持ち放蕩で東京へ飛出して金を儲けては使ふて放蕩無頼に暮して居たものか、何時の間やら年が寄

りて思ふ様に働けぬ、其上に若い時分の金のサビが出て身動きも出来ぬ様になりて少しばかり有りた品物も賣りつくし何んとも仕方のない様になりて初めて若い時分のことが、後悔になり國に残した母親の事が思い出され何にかして一度母に會ふて詫言を云い度い破れ着物に二本杖をつき誠に見苦しい相たて故郷へ歸りて来る道中の驛々には澤山な茶屋や宿屋はあるけれども、其相たさ見て休め泊れと云ふて呉れるものもなく、つかれた足を引き摺りながら生れた村へ歸りて來れば一家親類の者でさへ道で會ふても竺を傾けて相手にして呉れぬけれども、いよく歸りて見るに四本柱の破れ家から年老いた母親が飛出してオ、能うこそ歸りて來て呉れた、貴様か家を飛出してから、今日が日まで貴様のことを思い續けて忘れる暇か

なかつた、待つて居たサア這入れと云ふて呉れたときは云何であらふ親なれはこそ喜ふより外はない、吾々も斯うして居る間はいろ／＼の者をたより力にして居るけれども、いよく死んだ其時は家内眷屬の者は火葬場までは送りて呉れても、夫れより先きは一人の旅ぢや、其時になりて善根功德の旅費があるか、冥途の旅に諸佛の茶屋や菩薩の宿屋は澤山あれど、路用金を持たぬものは引き受けて下さらぬけれども、清淨眞實の親様なれはこそ、吾れをたのため必ず救ふと呼て下さる先手の一言か心底へ被られて見れば斯る無善造惡の私を呼んで下さるは、三世に一佛恒沙に一體清淨眞實の彌陀御一佛で御座るそこ、本願名號の御理りにむづさすがり奉り後生御助け候へど彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なさしめて頂く

のか偏へに他方廻向の御手柄である程に、懇謝の不行か何よりの肝要、

第十四回

告也述也宣述人意也

告也述也宣述人意也と仰るのは歸の字には説の字の訓がありて、説とは佛説の説の字である、之れにイツとサイと云ふ讀方がある、そこでイツと云ふときは、ヨリタノムと云ふ意味があらわれ、サイと云ふときは、ヨリカ、リと云ふ意が出るけれども、もごは説の字にある、此説の字に告也述也と云ふ訓があるのちや、今は悦税の二音をもこの説へ戻して其説の音の訓をあげて告也述也と仰せられた、そこで告とは佛告阿難なぞと云ふ告の字でありて、告くると云ふこと、釋迦如來は吾々が未來の行先きに付て他方本願の理りを知らぬ

御告げ下さるのが告の字の意である、述也と云ふは述ふるに云ふこと、述して作らす信して古を好むと云ふことかありて同じ口で云ふことでも自から拵へて云ふこと、又古から有りたことを、其まゝ云ふこと、二通りあるので、釋迦如來か彌陀の本願の理りを御傳へ下さるに考へ巧夫を用立て釋迦如來の心の中から案じ出して仰せられたのぢやない、彌陀の思召の通り御傳へ下されたのぢや、同行申爰を氣を付けねはならぬぞ、豫々御手厚き善智識の御化導を被りて居ながら助け玉へ彌陀をたのめと云はるゝと、胞につかへ、たのめは自力ぢやあるまいか、たのめは御化導に外つれる心地がする處から自身の手前て彼れて助かる是たで助かるに御助けを、彼れ是れ云ふは申譯けのないことぢや、釋迦如來てすら彌陀の本願を増

してせず、減すもせず、御傳へ下されるのである、爾るに吾々も釋迦如來を比へて見るに天地の違よりはまだ、大變な違ぢや、釋迦如來てすら私しを雜へなさらぬのに、斯る御粗末な吾々か彌陀の本願に小刀細工を入れて彼れ云ふは如何にも勿體なきことぢや、釋迦如來は何を御述へなされたと云へは宣述人意也とありて、人は二河白道には西岸上に人在りある人で即ち彌陀如來のことぢや人の意を述ふるは釋迦如來か阿彌陀如來の御意を御述へなさるゝことぢや、阿彌陀如來の御意とは如何なる御意かと云へは第十八願か阿彌陀如來の御意である、そこで彌陀の御意第十八願の謂れを釋迦如來か、吾々に述へて下されたのが第十八願成就の十句四十字の御化導である、若しや此願成就の御化導なかりたとき、第十八願

の御意を頂くことは出来ぬ試みに第十八願を直ちに頂て見ると至心
 信樂欲生の三信があるが、此三信は別々にあるやら一口に願張るの
 やら、又信と行との二つを誓はせられた故、信したとき信を貰い、
 稱へたときに行を頂く信行別々に被むるのであるか、また信行一
 度に貰ふのか解らぬ、そこで釋迦如來か此第十八願の意阿彌陀様の
 思召を御傳へなされて聞其名號信心歡喜乃至一念と御示し下され、
 善智識の教の下て名號の御理りを聞き開かれた有のまゝ、二心なく彌
 陀一佛をたのみ奉る、立處に即得往生住不退轉の御利益を被むるの
 ちや、と御傳へなされた、此處か如何にも大切な處であるぞ、御客
 を招けは臺所に於て料理を調へ、座敷へ出して御廉末なものなれご
 も御喰り下されと云へは、最早主人の役は濟んだ筈ぢや、處か招か

れた客人が大人なれば夫れで宜けれども、頑是ない子供なれば御膳
 を突き出しりはかりては主人の親切が届いたとは云はれぬ、子供の
 側へ行て手拭いを膝の上に載せ腕のふたを取りて、サア此手で箸を
 持て之れは斯うして御喰りご何もかも世話をしてこそ主人の親切か
 届たと云ふものぢや、今阿彌陀如來か五劫兆載永劫の永の間因位の
 臺所で南無阿彌陀佛の御馳走を御拵へなされたが、夫れを一切衆生
 の前に突き出してサア喰へよと仰せられたら夫れで御役目やすんだ
 筈ぢや、處が吾々は未來に取りて小供同様で如何して頂くのやら知
 らぬ故、釋迦如來ご姿を替へて此世へ御出まじなされ、第十八願の
 御馳走の喰へ鹽梅を御教へなされて、信と行とは別々に喰へるのぢ
 やない、善智識の教の下てたのむ者を助けふと呼て下さる御一言か

心の中へ被られ有のまゝ信心歡喜乃至一念と吞み込まして貰ふた立處に即得往生住不退轉之無始已來の惡業煩惱は願力の不思議を以て消滅して頂き娑婆に居ながら正定聚不退の住を御免に預るのちやと御教へ下されたのである先づ、

第十五回

其二

宣述人意也とは説の字に付ての思召を御教へ下されたのちや、處か爰は如何にも解りにくい話である、能く考へて見られよ、是以歸命者本願招喚之勅命也とある、爾れは彌陀の仰せである、爾るに彌陀の仰せの中へ釋迦如來の言を雜へると云ふは、合點の往かぬことちや、彌陀如來の勅命に釋迦如來の説法を雜へると云ふは如何なる譯けてあらふか、此事は御開山は只今の行卷に限らず、尊號眞像銘文

の御釋も之れを同じく歸命はすなはち、釋迦彌陀二尊の勅命にしたかじめしにかなふことまふすことばなりと仰せらるゝ歸命の二字は彌陀に歸經すること故、彌陀の勅命にしたかなと仰せらるゝかよい、爾るに釋迦の説法を雜へると云ふは如何なる譯けてあらふか、能く考へて見られよ、釋迦如來の御出世は何時でありたと云へば三千年已前である、南無阿彌陀佛の御成就は三千年や萬年ちやをい、十劫の昔に出來上つてあるのちや、さすれば若し釋迦如來の御出世前に南無阿彌陀佛の謂れを述べは何となる、二尊の勅命とは云はれぬ彌陀の仰せにしたがいめしにかなふこと云はねばなるまい、するに南無阿彌陀佛は釋迦如來の出世の前と、出世後と謂れが違ふやふになる、實に面倒な話ちや如何にして斯う云ふ譯けになるかと云へは其

源に付けば、善導大師は散善義に就人立信就行立信と御教へなされ
 て、人に就て信を立て行に就て信を立てると云ふことぢや、そこで
 第十七願か人で教へ手、教へらるゝ理りが第十八願の行ぢや、爾れ
 は就人立信とは第十七願の教の如く、信すること就行立信は第十八
 願の約束を信すること此就人立信と就行立信とを二河白道に二尊の
 勅命に信順すること仰せられたのである、彌陀の仰せと釋迦の仰せの
 如くなれよと云ふことで釋迦の仰せは第十七願の教の如く、彌陀の
 仰せは第十八願の謂れの如くと云ふこと尊號眞像銘文に之れを稟け
 させられて歸命は即ち彌陀釋迦二尊の仰せにしたかひめしにかなふ
 こまふすことばなり、この玉ひたもの釋迦と云ふは人體を指いたも
 のぢやない、名號の理りを教ふる第十七願の如くなれと云ふこと、

爾れは只今告也述也宣述人意也と仰せらるゝは、第十七願の通にな
 ると云ふことである、此第十七願は如何なる願かと云へば、諸佛に
 讚嘆せられたいと云ふ御誓いである、此御誓いより顯はれて諸有諸
 佛か御讚嘆なさるのぢや、何んぞ御讚嘆なさるかと云へば之れを行
 すれば西方の往生を得、之れを信すれば無上の極證を得ると仰せら
 るゝ此教の如く、心の中へ被られた有の儘後生御助け候へと彌陀一
 佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なさしめて頂くは偏へに他力
 廻向の御手柄である、

第十六回 命之八訓

前回までに歸の字に付ての御字訓を略辨したが、今回より命の字に
 八訓ある、其思召を取り次に及ぶ、先つ初めに業也とある業とは

業因ぎよゐんと云いふて何事なにことでも因たへかなければならぬ、況いはんや凡夫ぼんぷが佛ぼつになる
 と云いふ大仕事だいしごとに重大ちゆうだいなる因たへがなければならぬ、そこで其因そのたへと云いふは
 彌陀如來みだたらいの勅命ちよくめいである、其勅命そのちよくめいは并なみ一通りとほの勅命ちよくめいぢやない、乃往ないちう
 過去くわこく久遠きうえん無量むりやうの昔むかしより惡人あくにん女人にょにんを救すくひ度たいこの大慈だいじ大悲だいひの御みまこと
 より永世やうせの間あひだ諸苦しよこ毒中どくちゆう我行ぎやう精進しやうじん恐終おそしゆう不悔ふくわいと毒どくの中なかも御み厭いといなく炎ほのよの
 中なかも御み厭いといなく御み苦くる勞らうあらせられ、其御そのみ骨折ほねたより出來上できあたのが南無
 阿彌陀佛あみだぶつの六字ろくじである、此六字このろくじが彌陀如來みだたらいの御み口くちに顯あはれさせられ
 て勅命ちよくめいとありたのぢや、此勅命このちよくめいは如何いかなる勅命ちよくめいかと云いへば蓮如上人れんにょしやうにん
 は阿彌陀如來あみだたらいの仰おほせられける様やうは末代まつだいの凡夫ぼんぷ罪業ざいごふの我等われらたらん者もの罪
 はいかほとふかくとも、われを一心しんにたのまん衆生しゆじやうをはかならずす
 くふへとと、おほせられたり」と御み示ししなされた之これれが正ただしく彌陀みだ

如來にょらいの勅命ちよくめいである、動うもするご十方衆生じふしやうしゆじやうの御み言ごん故人ごにんご中間ちゆうかん聞ききに
 て私わたくし一人ひとりご引ひき受うけ居ゐぬ者ものもあれとも、爰こゝを大切たいせつに聽聞ちやうもんせねばなら
 ぬ、御開山ごかいざんは五劫ごこつ思惟しゆいの本願ほんがんも兆載てうざい永劫やうこつの修行しゆぎやうも只ただ此親鸞しんらん一人ひとりの爲ため
 めなりと御み引ひ受うなされた、阿彌陀如來あみだたらいの勅命ちよくめいは中間ちゆうかん聞ききにするのぢ
 やない、吾身わがみ一人ひとりに引ひ受うけて聞きかねばならぬ第十八願だいじちはつがんに十方衆生じふしゆじやうと
 ある故ゆゑ、一人ひとりで一分いちぶんを聞きくと思おもふは宜よろしくない、天上てんじやうの月つきの宿やどるは
 水みづのある處ところ大小だいせうに拘かはらず、全分ぜんぶん映うつるのである、露つゆでも大海たいかいでも月つき
 影かげは全まったく映うつるので月つきの手前てまへでは大海たいかいの水みづも馬うまの蹄ひづめの跡あとに溜たまりた水みづも
 少すこしも厭いとはぬ、一月いつげつ萬川まんせんに映うつると云いふて水みづさへあれば、何處どこにも映うつ
 るのである、吾々われらは十方衆生じふしゆじやうとある故ゆゑ一分丈いちぶたけけを被かむると云いふのぢ
 やない、無善造惡むぜんぞうあくの心こゝろの中うちへ阿彌陀如來あみだたらいの勅命ちよくめいが映うつりて下くださつたれ

ばこそ、彌勒菩薩の先駁することが出来るのちや、阿彌陀如來の仰せられける様は末代の凡夫罪業の吾等たらんもの罪はいかほごふかくとも、われを一心にたのまん衆生必ず救ふと呼て下さる勅命を、一々味ふて頂て見れば何んご御引受が出来るか、喩へば御本山へ參詣をして門前に出ると、オイ越中の同行ご大聲で呼ぶ者がある、一寸立止りて後をふりかへりて見るイヤ／＼此處は澤山な人故、越中の同行ご呼て居ても私のことちやあるまいご、返事をせず歩むご今度は越中國の東礪波の同行ご云ふご、私か知らんと思ふて見たがマテ澤山な人の中故、東礪波からも澤山同行が來て居る、私ちやあるまいご返事をせず居ると今度は越中國東礪波郡の井波町の同行ご呼たら返事をせず居られまい、今も多人數の中に聞て居ても一

人で聞かねはならぬのちや、末代ごは上代の方のごことではない、釋迦如來には三千年遅くれ彌勒菩薩の出世には五十六億七千萬年早い二佛の中間眞の間に生れ合した私を呼て下されたと思ふたが、マテ／＼其末代の中にも智者もあり、聖者もないごは云へぬよもや私のごことちやあるまいご聞き流しにしたが向ふ様ではそうちやない、今度は末代の凡夫ちやご仰る故に、凡夫ご云はれるご智者ちやない、私であらふかと思ふたが、イヤ／＼而し凡夫ご云ふても善人もあり悪人もある、吾々の様な朝から晩々から朝に至るまで、五欲の吾家にありて貪欲瞋恚愚癡の煩惱で血烟り立て、日立てをして居る、私ちやあるまい氣を止めずに居る處へ罪業の吾等たらん者ご云はれて見れば黙して逃ける譯けには行かぬ、吾れをたのめ必ず救ふと呼て

下されたは他のものぢやない、私一人を呼で下されたのぢやと御粗末な心の中へ被られて見たら、斯る無善造悪の私を本と御救いませますは、何たる廣大の御本願で御座るぞと餘念なく、はからひなく彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なさしめて頂くは偏へに他力廻向の御手柄と、廣大の御恩を喜び、稱名相續致さるゝか何より肝要、

第十七回

業也

此命の字は儒道では、天命と云ふ此天命は佛道で云ふ業と道理は一つである、同行衆には一寸六ヶ敷いか知らぬが、此天命と云ふは理の方から云へは人間手業で出来ぬ、約束が天命でありて、春になれば櫻には櫻の花梅には梅の花が咲く之れは餘り面白くないから今年

は梅に櫻の花を咲かせ度いと如何程骨を折て見ても、矢張り梅には梅の花が咲く又秋になるよ木の葉が落ちて面倒だから、今年には木の葉を落さずに置ふよ力氣味で見ても矢張り秋になれば、木の葉が落ちる之れが天命と云ふもので、道理上の約束である、そこで吾々の壽命の命の字は天命の命の字で壽命は天命と同じことで、如何程死に度くないよ、思ふても死なねばならぬ、之れは天命でありて死ぬるも生まるゝも共に天命である、そこで儒道の天命を佛法では業道と云ふて自身で働いて拾圓の金を貯めて拾圓の用きをするので、百圓は使はれぬ、之れは拵へた業で果を得るものぢや人間界で長命者と短命者があるは、自業自得と云ふものぢや、夫れは如何なる譯けぞと云へば業は澤山あるが一例を擧ぐれば正法念處經に長命する譯け

が三通りありて、第一に人に物を施す第二に生あるもの、命を助ける第三に病人を親切に看病する此者が長命をする説である、爾れば此反對が短命である、金持ちでありて自由にして居ながら亭主盛りに死ね者がある、之等は過去世の業でありて、長命も短命も共に自業である、過去で造りて來た業で此世の果報を得るのちやから、此世で何んとするこもならぬ、夫れ故に儒道の天命と同じこころである、兎に角天命も約束に違はず業も約束に違はぬ故に、只今は命の言は業也と仰せられた、そこで同じ命でもいろくあるが起信論義記に賢首大師は諸佛の教命と申されて即ち彌陀如來の勅命のこころちや、吾々の云ふこころなれば今云ふた舌の根の干かぬ中に變りて仕舞ふ倫言汗の如しと云ふて御天子様の一度仰せられたこころは、少し

も狂はぬ、昔し或は御天子様が小倉山の紅葉を見ると仰せられた時に小倉山の紅葉が皆散りて仕舞ふてありた處が、貞信公と云臣が最も紅葉は散る時節であるが、天下に天子に叛ふものはないと云ふて小倉山へ行き「小倉山みねの紅葉こゝろあらば今一度の御幸またなん」と一首の歌を詠まれた處が谷川に流れて居た紅葉が悉く元この枝へ付いたと云ふこころちや、して見れば何物でも天子様の命に叛くものはない、彌陀如來は諸佛の王様である故に、阿彌陀様の勅命は毛頭狂はぬのである、其狂はぬ處を業と仰せらるゝ此仰せ一言を御粗末な心の中へ彼りて見れば罪は如何程深くとも吾れを一心にたのまん衆生必ず救ふとありて煩惱断せよこもなく、修行戒行せよこはない、無善造惡の私をたのむばかりで助けたまへるは彌陀如來の本

願ばかりなりと二心なく、彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なさしめて頂くのか阿彌陀如來の勅命ぢや、ほかに喜びく報謝の太行が肝要、

第十八回

命言葉也とある思召に付て前回にも一通り話したが、御開山は命言葉也と仰せられたは、何れに御依りなされたか云へば聊か込み入りた話になれども、吾御開山の御苦勞の程を頂て見ねばならぬ故、御取次きに及んで置く、そこで行卷に歸命の御字訓の前に善導大師の立義分の文と言南無者の文を并へて御擧げなされて其立義分の序題文に言弘願者如大經說一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲増上縁也とある文を御引きなされて、其次

きに言南無者の文を御擧げなされた、そこで只今命言葉也とは大願業力の業が據でありて、御開山は序題文の次に言南無者を御擧げなされたは、大願業力は斯ふのものであると云ふことを顯はす爲めである處が言南無者を引てもまだ大願業力の合點が往かぬ故、字訓を以て御教へなされたのぢや、此大願業力とは如何なることか云ふに大の字が三つになるので一には大願二には大業三には大力である此三つが南無阿彌陀佛の六字の中にある、それを顯はす爲めに字訓を以て御教へなされたのぢや、そこで亦是發願廻向之義とある、之れが大願卽是其行か大業必得往生は大力である、此名號の中には大願大業大力の三つの手柄がある故、大願業力に乗ると仰るのぢや乗とは乗ると云ふこと此乗すに云ふ文字の意の顯はれたのか歸の字

故に歸の字を釋して歸悅也歸稅也と仰せられて、其御左訓にヨリタ
 ノムヨリカ、リご御示しなされた其ヨリカ、リごは乗托の義であり
 て之れは前回に話したが、大願業力に乗すと云ふはヨリカ、ルこと
 である、そこで乗ると云ふことは向ふの様子が知れぬと中々直くに
 乗れぬもので此濱から浦鹽斯德へ行かうと思ふときには小舟に乗り
 て行く氣にはなれぬ、第一船が丈夫でないも乗れぬ又た船頭が上手
 でないも行かぬ何程船が丈夫で船頭が上手でありても、又た其船頭
 が不親切では乗れぬ、又如何に親切でありても、船賃が高價では乗
 られぬして見れば遠い處へ船で行く時には第一に舟が丈夫なものと第
 二に船頭が上手で親切なものと第三に船賃の安いものと此三つが揃ふて
 ないこと、船に乗ることは出来ぬ、解りたかへ今此三つを顯はして下

されたのが大願大業大力でありて阿彌陀如來の第十八願は廣大ごも
 廣大ごも十方恒沙の諸佛が佛けに御成りなさつたは、第十八願であ
 る、又十方衆生悉く載せても沈む氣づかないのが、第十八願又
 此船頭は下手で不親切かと云へばさうぢやない、御和讃に彌陀觀音
 大勢至大願のふねに乗してぞ、生死の海に浮みつゝ有情をよほふて
 のせたまふとありて本師法王の阿彌陀如來が船頭で觀音勢至か手
 傳役で親切一杯で渡さうとあるのぢや、そこで之れに乗るには善根
 功德の舟賃が入用かと云へば決してさうぢやない、喜はねばならぬ
 と云ふのぢやない、罪はいかほど深くとも吾れを一心にたのまん衆
 生必ず救ふと呼で下さる御意一言が無善造惡の心の中へ至り届いて
 下された有のまゝ後生御助け候へご二心なく、彌陀一佛をたのみ奉

る立處に往生の大事満足なさしめて頂くのが、大願業力の御手柄である先づ、

第十九回

大願大業大力に付て大願は阿彌陀如來の第十八願を大願と仰せらるゝのちや、そこで彌陀の第十八願には那是に大の字が付くのかと云へば同じ願ひでも近く云へば此處で一番の金持になり度いと云ふ願ひと私は處一番の金持ちになりて、村中の貧乏人を救ひ度いと云ふ願ひと何れか大きい願ひであらふか、此處で一番の金持になり度いと願ふのは吾身だけの願ぢや、又澤山な貧乏人を救ひ度いと云ふ願は吾身を捨て、人を救ふと云ふ願であるから、大きい願である、今阿彌陀如來の本願は越中や日本位ぢやない、三誓の偈文には我於

無量劫不爲大施主普濟諸貧苦誓不成正覺とある、之れは彌陀如來が無量劫に於て大施主となりて普く諸の貧苦の者を救はずば正覺ならじと御誓ひなされたのちや、斯く申すに私の家は相當に財産もある故、貧乏はせぬと思ふ人があるかなれども、今阿彌陀如來が貧乏人と仰るのは財産のないことぢやない、吾々の心の中に善根功德の寶のないことを貧乏人と仰せらるゝのちや、那是吾々の善根功德に貧乏するかと云へば觀經には爲煩惱賊之所害者とありて、煩惱の賊に奪はるゝのちや、何故に此煩惱の賊が蔓延かと云へば阿彌陀經に五濁惡劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁とありて時が惡るい夫れが爲めに善根功德を取られて仕舞ふのである、夫れ故十方の諸佛は度斷智證の四弘誓願を立て、一切衆生を佛にし度いと思召すけれども、何を云

ふても一行勵ます一願起さぬ、此身故手の掛け様がないと、諸佛の御慈悲に漏れた吾々であるが、爰に於て吾れ一人救はずんば又何れの佛の助けたまはんぞと思召て無上の大願を起なされたのが、彌陀の御一佛である、正信偈に建立無上殊勝願超發希有大弘誓と御示なされた、無上勝殊願とは十方恒沙の諸佛の本願に比へても彌陀の本願に及ぶ本願がないと云ふことちや、御和讃に願力無窮にましますば罪業深重おもからず、佛智無邊にましますば散亂放逸もすてられずと、御意あらせられ罪業深重もおもからずとは彌陀の本願に極まりがない故に、重くないと仰せらるゝ又佛智無邊である故に散亂放逸もすてぬとあるのちや、散亂と云ふは散り亂れること云ふことで佛道修行には最も嫌ふのちや、同行中でも店に居て帳合をする時に心

が散り亂れては出来ぬであらふ、況んや佛道修行に心か散り亂れては佛になることは出来ぬ、又放逸と云ふは悪には進むけれども、善い事には退くと云ふ様なことちや、同行衆能く考へて見られよ、慈善事業であるとか或は赤十字などに加入するには善事なれども、善さ知りながら出来ぬけれども、悪いことでも儲け仕事があること直ぐにやりかゝる之等は佛法では大に嫌ふけれども、佛智無邊である故に、斯る者でも助かるのちや、して見れば彌陀の本願と云ふは手にもかゝらぬ御粗末な私が善智識の御化導の下で名號の御理り心底へ被られた有のまゝ二心なく、彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なさしめて頂き何時なりとも命の終る次第には彌勒菩薩の先き駆けて安養淨土へ往生とげさしめ貰ふは全く他力回向の御手柄

ご報謝大行か何より肝要、

第二十回

南無阿彌陀佛の六字に大願大業大力の三つの手柄がある、大願ご云ふは前回に話したから只今は大業ご云ふに付て御取次きに及ふ、そこで其大業ご云ふは即是其行である、其即是其行ご云は如何なるものかご云へば即選擇本願是也と御教へなされた之れを善導大師は一心専念彌陀名號行住坐臥不間時節久近念々不捨者其名願彼佛願故ご仰せられて御經を讀むも觀察をするも、禮拜をするも香花燈明を上るも淨土の業なれども、之等は助業で正定業は南無阿彌陀佛の六字より他にはない、此正定業の御手柄があればこそ、鬼をあざむく大罪人が易々と往生ごげさして頂くことが出来るのちや、善導大師は

散善義に自身は現に之れ罪惡生死の凡夫曠劫已來常に没し常に流轉して出離の緣あることなしご仰せられた、此出離の緣あることなしご云ふは増上緣かないご云ふことちや、そこで佛になるに付ての増上緣は何であるかご云へば大願業力爲増上緣ごありて、南無阿彌陀佛の六字が増上緣であるご仰せられた處が、増上緣にも善惡ありて此六字の増上緣は善導大師の定善義に諸邪業繫さわらねばご御示しなされた、諸邪ご云ふは吾々の邪見な心でありて、僅かに三人か五人の家内で殆んど栗の糞殻の中に居る様な恐しい日送りするのが、邪見の有様ぢや、又學問のあるものでも因果の道理を辨へぬものは諸邪の中へ這入りて仕舞ふのちや、又業繫ご云ふは十惡五逆の大罪人で大地が割けて地獄へ行かんばかりの恐ろしき者でもさわらぬの

が増上縁である、爾れば無善造惡の吾々空手つくねて落つるより仕方のないものが、彌勒菩薩の先き駈けをする手柄は此増上縁である曇鸞大師は論註に此増上縁を御示しなされて、劣夫駈馬に乗ると云ふて不甲斐ない男が役立たぬ馬に乗りて四天下を乗り廻はらるごしても出来ぬけれども、帝釋天が吾々の善惡を調べる爲めに四天下を御廻りなさる其時に例の男が天釋帝の御供をするご帝釋天の威力によりて四天下を廻るごごが出来る、之れが縁上縁ぢやごある吾々は佛ごころか菩薩ごころか二度ご人間界にさへ顔出しの出来ぬやうな者が佛になるには私の智慧用きては出来ぬ、南無阿彌陀佛の増上縁があればこそ、佛になるごごが出来るのぢや、此南無阿彌陀佛を頂くは得難い御謂れがあるのぢやない、善知識の御化導の下でたのむ

者を助けふごある、名號の御約束心の中へ被られた有のまゝ二心なく、彌陀一佛をたのみ奉る立處に南無阿彌陀佛をそつくり吾物にさして頂き何時命終るごも安養淨土へ往生ごりさしめ貰ふは全く他力回向の御手柄ぢや程に心得誤りなき様法義相續が肝要、

第廿一回

大願業力に付て前回までに大願大業の二に付て話したから、只今は大力ご云ふごごを御取次きに及ぶ、そこで大力ごは如何なるごごご云ふに華嚴宗の開山賢首大師の探玄記に力は勇幹に名つくごありて、勇幹ごは木の本枝ご云ふごご、本枝は枝葉を持ち果實を以て風にも雨にも雪にも堪へて折れぬを云ふ第十八願は一切衆生の未來を引受けて如何なる者ても助ける力がありて、何程一切衆生が賢貪邪

見の波風を持つて向ふても折れる氣づかないのが第十八願の力
 即ち大力と申すものぢや、惡人女人と名の付いたものは、十方の諸
 佛に永不成佛必墮無間と見すてられたものなれども、彌陀の本願は
 男女善惡をはたらかさず、本形のまゝにて助からざるものを助けた
 ればこそ超世の悲願とも横超の直道と申すのぢや、ごありて助かる
 縁も手掛りもないものを助け玉ふが力である、涅槃經に佛になる規
 則を説である、之れに叛いた者る惡人で佛になることは出來ぬのぢ
 や、學校の規則に叛いて生徒は卒業するところは出來ぬ、吾々は佛に
 なる規則に叛いて居るのぢや、其規則と云ふは諸惡莫作修善奉行自
 淨其意とありて惡と云ふ名の付くものはするごなもぬ、善は何處
 までもせよ己が心を淨くせよと云ふ規則であるが、吾々は何處まで

腐り込んだ心中やら、惡事は何處までもするか善い事は出來ぬ朝か
 ら晩々から朝に至るまで口に云はねば相たにする相たにせぬは意に
 思く身口意の三業到る處惡業煩惱ならざるはなく、横から見ても豎
 から見ても佛になられる相たと云ふては少しもなく何んご考へて見
 ても佛になる規則を履まれぬ吾々である、又た法華經に女人は佛法
 の非惡とありて佛法を入れる器でない、籠の中へ水を入れるご直く
 漏りて仕舞ふけれども、瓜や茄子を入れるご入る之れは水を入れる
 器でないからちや、女人と云ふものは煩惱の瓜や茄子が這入るかな
 れども、佛法の水を容れても直く漏るのぢや、して見れば佛法の規
 則に叛いた惡人佛法の器でない、女人は毛頭佛になるごは出來ぬ
 ごも彌陀の本願は不思議の本願でありて如何なる十惡五逆の惡人五

障三從の女人でもたのむばかりで助けたまふが、第十八願であるこ
御手厚き善智識の御化導の下で南無阿彌陀佛の御理りを被らしめて
頂き枯木に花の咲くためしがあることも佛になられぬ、私を助け玉へ
る彌陀如來の本願ばかりぞこ、餘行餘善に心をかけず、餘佛餘菩薩
に思ひをめぐらさず、後生御助け候へと彌陀一佛をたのみ奉る立處
に往生の大事満足なさしめて頂くは全く第十八願の御力である先づ

第廿二回

此阿彌陀如來の力と云ふに付て、分けて見ると因力と果力との二つ
である、因力と云ふは、因位の本願力果力と云ふは本願成就の力で
ある、大經に威神力故本願力故満足願故明了願故堅固願故究竟願故
とありて、初めの威神力故は果力後の五つは因力である、先づ初め

の威神力故とは南無阿彌陀佛に威力があること云ふこと、御和讃に願
力不思議の信心は大菩提心なりければ、天地にみてる惡鬼神みなこ
こくくおそるなり、とありて鬼が恐れること云ふことぢや、動もす
ること念佛を稱へながら神子などに見て貰ふて彼れ是れと云ふ者があ
る、之れは南無阿彌陀佛の廣大なことを知らぬからぢや、四天王が
念佛の行者を護ると釋迦如來の前に於て申上た、又諸有神佛が念
佛の行者を御守り下される、之れが南無阿彌陀佛の威勢である、次
に本願力故と云ふは本願の力は如何にも廣大でありて、此本願の力
を次に満足願故明了願堅固願故究竟願故の四を以て顯はしてある
第三に、満足願故と云ふは阿彌陀如來が始めに四十八願を御建てな
されて之れを成就したが、半分は出來たが後の半分は思ふ通りに出

來ぬと云ふことはない丁度十五夜の満月の如く少しも欠け目かなく
 出來上つたのちや、之れは中々出來ぬことで、吾々で云ふて見るこ
 座敷を一間建立て度いと思ふても初めの中は種々考へて居たが、
 愈々建築に取り懸るゝ天井も思ふより悪くなりたり、此處に押入を
 取りて彼處に床の間と思ふて居たが、光線の工合が悪かつたり或は
 風の向きが悪かつたり、何として初めに思ふて居た通りに出來ぬ
 ものちや、僅かに座敷のここでさへ斯ふちや、阿彌陀如來の四十八
 願は并大抵の本願ぢやない、一切衆生を悉く佛けにせずは措かぬこ
 云ふ大願である、此大願が思ふ通り少しの欠け目もなく満足したの
 ちや、第四に明了願故と云ふは明了はあきらかと云ふことで吾々の
 心の中なれば如何にも底暗いもので親子兄弟夫婦の中でさへ心が分

らぬ、常々一處に居ながら心の底の知れ難い、丁度暗夜に手探り仕
 事をして居る様ぢや、之れは煩惱でかためた心であるから親子兄弟
 ごころか自己の心が自己自心に解らぬものちや、處が阿彌陀如來の
 本願はそうぢやない、奥底まで透き通つた本願で暗處と云ふは少し
 もなく、隅から隅まで明了であるのちや、夫れは煩惱の眞氣がない
 故である、第五に堅固願故と云ふは、堅いと云ふことで阿彌陀如來
 が初めに四十八願を御建てなされて何處々までも成就する考へて
 ありたが、やりかけて見るゝ六ヶ布いから廢止するゝと云ふ様なこと
 はない、假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔とありて、たごへ毒の
 中でも炎の中でも通り抜けて成就するゝある、之れが堅固願故であ
 る、第六に究竟願故とは之れまでは助けるが是れ以下は助からぬの

或は男子は助けけるが女人を助けぬ云ふことなく、凡夫も聖者も智者も愚者も善人も悪人も男子も女人も漏さず御救ひましますのが、究竟願故である、爾れば阿彌陀如來の御力云ふは果上から云ふても因位から見ても如何にも廣大でありて、此御力を南無阿彌陀佛の六字に封し込めさせられ之れを與へ玉へるには吾れをたのめ必ず救ふの一言貰ふた相たは、もろくの雜行雜修をなけすて、後生御助け候へこ二心なく彌陀一佛をたのみ奉る、立處に往生の大事満足なさしめて頂くは偏へに他方回向の御手柄である先づ、

第廿三回

招引也

命言者業也と仰せられた思召は前回までに取り次ぎ申した、只今は招引なりとある思召を御取次きを致す、そこで招引云ふは招き引

く云ふことで阿彌陀如來第十八願を以て吾々を淨土へ連れて行き度いこの思召から第十八願を起させられたのちや、夫れ故障子一枚向ふのことすら疑ふ様な吾々か十萬億の彌陀の淨土に疑ひ晴れ、今日の日暮には降雨か晴天か解らぬ私が往生一つは足で大地を踏む如く確かな了解覺悟になり、未だ參らぬ先きから喜ぶ様になりたのは第十八願で招き引き立て、下されたからちや、御和讃に縱令一生造惡の衆生引接の爲めにこそ稱我名字と願しつゝ、若不生者と誓いたり「こあるは即ち極樂へ引き付けて下さることちや、信卷の初めに、夫以獲得、信樂發起、自、如來選擇願心と仰せられた願心云ふは、第十八願の心此第十八願は並の本願ぢやない、阿彌陀如來の膽も魂も入り充ちてあるか第十八願ぢやで、選擇の願心とある、こ

の心の字が字眼ぢや、一切衆生を佛けにする爲めに第十八願を拵へて、犬に握飯を放り出した様に、さあ之れを以て極樂へ來いと仰せらるゝ様なのぢやない、阿彌陀如來の大慈大悲の御心一杯込めさせられた、其第十八願が行者の心へ至り届いて下されたから始めて彌陀一佛をたのみ奉るのぢや、娘が嫁入して盆ぢやと云ふては親里を戀ひ慕い祭禮ぢやとて未だ二十日も三十日も日數のあるのに指折り數へて祭禮の日を待詫び親里の報恩講の日までを待つて又しても親里へ行き度いと云ふ心になるは母が娘のことを思ひ、暑に付け寒に付け娘が如何して居るやらと思ひ、美味い物を喰へるに付娘にも喰へさせ度い美しい衣服を見るに付け、娘に着せ度いと常に娘のことを思ふて居る其心が娘の方へ届いて居る故、故郷のことを忘れぬの

である、今彌陀如來が第十八願を起させられたは義理に迫りて起させられたぢやはい、衆生が三惡道へ墮ち行く相たを見て正覺の床に居るに居られず、法藏比丘と因位に迂り下らせられ、永世の間御苦勞なされた、御自身の御爲めぢやない、一願起すも女人の爲め一行勵むも惡人の爲めと無善造惡の私を佛にしたいの御張り込みがありたればこそ、炎の中も御厭いなく毒の中も厭いなく、御苦勞なし下された其疑りが御粗末な心の中へ至り届て下されたればこそ、はからひ多い私等へ深い私か二心なく後生御助け候へと彌陀一佛をたのみ奉る、了解覺悟になりたのは偏へに他方回向の所爲ぢや程に報謝の不行、

第廿四回

法然上人が選擇集に三部經に付て七選擇を擧げさせられた、其時に
 第五番に選擇化讚と云かある、これ觀經の散善中、下上品に於て（
 下上品と云ふは惡に三つある中の上等の部）多造衆惡無有慚愧と説
 てある、之れは諸の惡を造りながら、心に慚ぢぬ者のことにて如何な
 る煩惱を起しても之れは人間の當り前ぢやと、自身で惡いことをし
 ながら神や佛にあやまる心もなく自身の心ですまして居て虚言は日
 本の寶ぢやとか、十露盤の珠や筆の先きて、曲りたことをして商人
 と屏風眞直くに立たぬなど云ふて慚愧の心のないものが下上品の
 惡人ぢや、處が一生の間惡事をして日立をしたが、漸々と未來が近
 付いて來ると平生の惡事が心配になりてサテ／＼五十年の間惡いこ
 とばかりで日立てをした是れでは三塗離て行き方のなきものと氣が

付て善智識に遇ふて教を被りて見ると行法が二つありて、一には十
 二部經を讀誦するの二には南無阿彌陀佛を稱へよと教へて下さる
 、そこで教の通り一生懸命十二部經を讀誦し念佛を稱へて居た、
 さて愈々臨終の夕に到ると化佛が迎ひに來て下さる、すると下上品
 の惡人は大きに喜んで此度は貴方の御迎ひで往生することは何たる有
 り難いこと、喜ぶと、化佛の御言に汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝と
 仰る此御言は汝佛名を稱する故、諸罪消滅して我汝を迎ひに來たと
 仰るのぢや、貴様は念佛を申した徳で一生の間造りた罪は消へた故
 迎ひに來たと仰る處が爰を能く聞かれよ、初め善智識の教へには、
 二つの行法がありた故、來迎佛の御言にも汝十二部經を讀誦し念佛
 を申した徳によりて迎ひに來たと仰せらるゝ筈ぢや、爾るに十二部經

を讀んだと仰る御言はない、同行中爰が如何にも大切なことであるぞ、明に諸行を廢して念佛の一行と云ふことは、自ら爰で廢立の相だが顯はれる處ぢや、教へられたときは二行で御迎の言は念佛一行ぢや、大海の魚が自身で陸へ上らふとしても中々上がれるものぢやないが、釣針を呑んだればこそ陸へ上ることが出来る吾々は生死の海に沈みて居て自身で上ることは出来ねども、南無阿彌陀佛の釣針を呑んで浄土へ引き上げて頂くのぢや、之れか招引である、何んぞ工夫をして見ても次生二度と人間界にさへ顔出しの六ヶ敷い御粗末な者が縁覺や菩薩位ぢやない、五十二段の階級を一と飛にして彌陀同體の御證りを開かじめ貰ふは南無阿彌陀佛の六字の御手柄である之れを吞まして頂くには心配苦勞の入用ぢやない、聞其名號信心歡

喜と善知識の御化導の下でたのめは助かる御謂れと云ふこと一つを被らしめ貰ふた有のまゝ後生御助け候へと彌陀一佛をたのみ奉る、立處に往生の大事満足なさしめて頂くは全く他方回向の御手柄である先づ、

第廿五回 使也

命に付て八訓ある中業也招引也とある思召は前回までに話したから只今は第三番目の使也とある思召を御取り次ぎに及ぶ、そこで使と云ふ、はつかへと云ふ字で梵網經に往來八千度とありて釋迦如來が此娑婆へ阿彌陀如來の御使ひとして御出下されたことは一度や二度ぢやない、八千遍まで迎に來て下されたのぢや、同行中何と有り難いことぢやないか、何程行き惡くい家でも三度四度の迎ひを受けた

ごきは行かずには居られぬ、蓮如上人御一代記聞書に存覺上人は釋迦如來の化身ぢやと仰せられた、夫れは如何なる證據がありて申されたのかと云へば存覺上人の御辭世に「今は早や一度の夢となりにけりゆき、あまたの、かりの、やごく」と詠まれたゆき、あまたの、かりのやごく、ご仰るからは往來八千度ごある御心に違いないして見れば釋迦如來は八千度まで御出下されたけれども、未だ惡事が調ひ兼ねたと見へて、いろくご相たをかへて御化導下さるゝごぢや、此様に幾度もく使を受けた故に、後生ごも菩提ごも氣の付かなんだ私か本願の御理りを聞く様になりたのである、又使はせしむるごも讀む字で御和讃に恩徳廣大釋迦如來韋提夫人に勅してぞ光臺現國のそのなかに、安樂世界にいらはしむ」とあるいらはしむ

と云ふ字か使の字と同一ことで、之れは全く他力を顯はして下されたのである韋提希夫人が釋迦如來に向はせられて何卒出離の大事を御教へ下されご、願はれたごきに釋迦如來は眉間の白毫より光明を放ちたまひ其光明が臺となりて十方の淨土を顯はしなされて汝が望みに任せて何れの淨土なりごも選べよと仰せられた時に韋提希夫人の御言に恩諸佛土雖復清淨皆有光明我今樂生極樂世界ごありて何れの淨土も結構なれごも私しは阿彌陀如來の淨土へ往生ごげ度ふ御坐るご、御願ひなされた之れは韋提希夫人の、働きて選んだのかと云へばさうぢやない、彌陀の淨土には選び取らせる丈けの仕掛がありた故、其仕掛の通り、選び取りたそこで只今の和讃には選はしむごあるのて選ぶは韋提希夫人選はせたは向ふにある、之れかしむご云

ふここちや、喩へば子供を菓子屋の店へ連れて行きお前の好む菓子を取れと云はれたときは、眼前にある芋や豆を取らずに奥の方にある蒸菓子を取るに違ひない、夫れは芋や豆には選ばせる仕掛けがなく、蒸菓子には選ばせる仕掛けがありたのちや、選ぶば子供選はせたま菓子のはたらきちや、今釋迦如來は十方淨土の中で何れでも選べと仰せられたけれども韋提希夫人は諸佛の淨土を取らず彌陀の淨土を取りたは、諸佛の淨土に選ばせる仕掛がなく、彌陀の淨土に選ばせる仕掛がありたのちや、其源法藏菩薩が世自在王佛の御前に於て二百一十億の諸佛の淨土を御覺なされて、其中から四十八願を選擇なされたは、廢立爲正の理りが其時からありたのちや、其四十八願から出來上つた淨土である故に、善導大師は四十八願莊嚴起超諸佛

刹最爲勝と仰せられた、其因位の昔のここを韋提夫人に釋迦如來がなさしめたまふたのちや、韋提希夫人は五障垢穢の女人なれども、餘佛の淨土をすて、彌陀の淨土を選び取られたは知らずくの中に廢立爲正の心を注いたのちや、吾々も本願を信するも、雜行するも皆人にして貰ふたのちやない、南無阿彌陀佛の六字の中に仕掛がある故其仕掛の通りになられたのちやで、吾が賢くて信じたのちやない、佛智他力のさでけによりて本願の由來を存知するものちやこ仰るからは向ふ様の仕掛けがありたればこそ、只今と云ふ只今は餘行餘善に心をかけず、餘佛餘菩薩に思いをめぐらさず二心なく彌陀一佛をたのみ奉り往生一定御助け治定の了解覺悟になさしめて頂たは何たる幸運の吾身ぞと報謝の稱名相續が肝要、

第廿六回

教也

命言葉也招引也使也。こある思召は前回に話したから、只今は教也。こある思召を取次きに及ぶ、そこで教也。こは賢首大師の起信論義記に命は諸佛の教命。こあるに、御依りなされたもので、狭く云へば釋迦彌陀二尊の仰せ廣く云へば十方恒沙の諸佛の仰せ。ちや、如何にも廣大なここちやないか、彌陀をたのため必ず佛になる。こ云ふこは阿彌陀如來ばかりちやない釋迦如來ばかりちやない、恒沙の諸佛が口を揃へて彌陀の本願を信せよ。こ仰せらるゝのちや釋迦彌陀二尊の仰せ。こ云へば彌陀と釋迦との仰せの違ふ場處もあれ。こ、只今はさうちやない、觀經の正宗分には二尊二教。こて釋迦の仰せと彌陀の仰せ。こ違ひので、釋迦は要門の主彌陀は弘願の主で、釋迦は十九願彌陀は第十

八願の主人公である、之れが二尊二教。こ云ふものちや、又流通に至りて見ると二尊一教。こ云ふて、阿難尊者に御附屬なさる時に要門の諸善萬行をすて、汝是語を持て其語を持て。こ、云ふは即是れ無量壽佛の御名を持て。こなり。こ、仰せられて釋迦の仰せも彌陀の仰せ。こ一つになりてある、之れが即ち二尊一致。こ申すものちや、又大經は一尊一教。こ云はねばならぬ、之れは古來無處の新名目なれ。こも、お前方の合點しやすき、やうに假りに暫く此名目を立てたのちや、觀經から頂て見ると斯くなるのちや、夫れは如何なる譯か。こ云ふに、釋迦如來が釋迦如來の格式で說せられず、阿彌陀如來。こなりて說かせられたのが大經である、御和讃に大寂定にいりたまへ、如來の光顔たへにして阿難の惠見をみそなはし問斯惠義。こほめたまふ。こあり

て大寂定だいじやくぢやうとは釋迦如來しやくかたよらいが大經だいけいを説せつかせらるゝ樂屋がくやである、其樂屋そのがくやに入りて大經だいけいを説せつかんと思召おもめして彌陀如來みたたよらいの相すがたたごなられたのちや、役者やくしやは男をとこでも樂屋がくやから舞臺ぶたいに出でるときは女をんなになりて出でると同おなじこと
 て、釋迦如來しやくかたよらいが大寂定だいじやくぢやうの樂屋がくやに入りて、それより大經だいけいの舞臺ぶたいでは彌陀如來みたたよらいの御相おんすがたたでありた、夫それ故阿難尊者あなんそんじやが其相そのすがたたを見て今日世尊こんにちせそん
 住奇特法じゆきつぽう今日世雄住佛所住こんにちせじゆぶつしよせんぢゆこんにちせ今日世眼住導師行こんにちせがんぢゆたうしぢゆこんにちせ今日世英住最勝道こんにちせえいぢゆさいせうだうこんにちせ今日
 天尊行如來德てんそんぎやうにょらいとくと五つの勝うれた相すがたたを驚おどろいて御尋おんたうねなされた、阿難尊あなんそん
 者じやは何時いつも釋迦如來しやくかたよらいの御隨行おんずゐぎやうをして居たらるゝ御方おんかたでありて誰たれが知し
 らいでも阿難尊者あなんそんじやは釋迦如來しやくかたよらいのことは、總すべて何事なにことによらず能よく知し
 て居たらるゝ筈はずちや、夫それを御尋おんたうねなされたは釋迦如來しやくかたよらいは御相おんすがたたが常つね
 と異ことりて阿彌陀如來あみたたよらいの御相おんすがたたでありた故ゆゑちや、處ところが阿難あなんの惠見ゑけんをみ

そなはし、問斯惠義もんしゑぎとほめたまふとありて、阿難尊者あなんそんじやが釋迦如來しやくかたよらいの
 常つねに異ことりた御相おんすがたたを御尋おんたうねなされたこと釋迦如來しやくかたよらいが御賞おんほめなさるゝ
 に及いたはぬ、實じつに合點あつてんの行ぎやうかぬ、ことであるが、此處こゝは如何いかににも、有あ
 り難がたい處ところであるぞ、斯問惠義もんしゑぎと御ほめなされたは阿難尊者あなんそんじやの問もんいが
 釋迦如來しやくかたよらいの世出しよつせいの本意ほんいの顯あはるゝ、基もとこなりたので、あるぞ阿難尊あなんそん
 者じやの問もんいがなかつたときは大經だいけいの會坐けいざは初はじまらぬ、若もし大經だいけいがな
 かつたときは吾々われが彌陀みたたの本願ほんぐんの理ことばりを被かよふることが出來でるのである、
 阿難尊者あなんそんじやの問もんいがありたればこそ、本願ほんぐんの理ことばりを被かよふことが出來でる
 のちや、釋迦如來しやくかたよらいの出世しよつせいの本意ほんいをあばき、出たしたは阿難尊者あなんそんじやの問もんで
 ある故ゆゑ、問斯惠義もんしゑぎと御ほめなされたのでありて、釋迦如來しやくかたよらいが其問そのもんに
 御答おんこたへなされて光闡道教くわうせんたうぢやく欲極羣惠よくごくぐんゑい以眞實之利いしんじつのり無量億劫難值むりやうゑくじやくなんぢ難見猶靈なんけんじゆれい

瑞華と仰られて一代經は月待つ宵いの手すさびにでありて、今日云ふ今日こそ出世の本意たる彌陀本願の理りを説くが此御法に遇ふたごは優曇華の様である、さて説かせられたのが大經である、此大經に第十八願の理りを説て下された故、末の世に生れ遅れた吾々がたのめば助かる御謂れに、夜明をなさしめて頂き後生御助け候へご彌陀一佛をたのみ奉り往生の大事なさしめ貰ふたは全く大經がありたればこそ喜び、報謝の稱名相續が何より肝要、

第廿七回

命と云へば彌陀の仰せに限る様に思ふて居たが頂て見ると、釋迦如来と御両方の仰せの様に思はるゝなれども、御開山の思召より頂けは彌陀を、たのめ、と云ふことは彌陀如来と釋迦如来ばかりぢやない、

い、十方恒沙の諸佛が皆御勸め下さるゝので、如何にも尊いことぢや、夫れは如何して解るゝか云へば諸佛が第十七願に酬い顯はれて御勸め下さるのぢや、阿彌陀經に釋迦如来が彌陀の本願を説かせられた、其時に恒沙塵數の如来が口を揃へて彌陀の本願を御讚嘆なされて南無阿彌陀佛の證據に御立ち下され、念佛申すものを晝夜守護して離れぬと仰せられた何故に諸佛の口を揃へて御勸めなされ、證據に御立ち下されたかと云へば阿彌陀經に釋迦如来が行此難事得阿耨多羅三藐三菩提と御説きなされて我れは南無阿彌陀佛で佛になりたご仰る釋迦如来が南無阿彌陀佛で佛に御成りなされた、ごして見れば申すまでもなく諸佛も六字で佛に御成りなされたのぢや、夫れ故、阿彌陀如来の他に諸佛もなく諸佛の他に阿彌陀如来はないと云

ふのが淨土眞宗の御教ぢや、御和讃に彌陀の淨土に歸しぬれば即ち諸佛に歸するなり、一心を以て一佛をほむるは無導人をほむるなりと一御意遊ばされた彌陀の淨土に歸したのが、諸佛に歸したのぢや彌陀の本願を讚嘆するは諸佛の徳を讚嘆するのである、無導人は一切誰佛のところで華嚴經に十方無導人一道より生死を出づと、ありて之れは十方無導人は導り多き人と云ふことで、諸佛のことぢや聲聞や縁覺でも障りかなるもので、聲聞は極速三生極遲六十劫と云ふ永の修行をしたが、厭苦障と云ふ障りがある、又縁覺に極速四生極遲百劫の修行をしたれども、捨大悲障と云ふ障りがあるして見れば障りのないのは佛けばかりでありて、即ち無導人は諸佛のことぢや、其澤山な諸佛が如何して證りに至りたかと云へば一道より生

死を出づとありて一道とは、般舟三昧經に三世諸佛依念彌陀三昧とありて彌陀一佛をたのみ奉りて佛になりたことあり、爾れは爺や婆々ばかりが彌陀の本願で往生するのぢやない、十方恒沙の諸佛が悉く吾々と同じく彌陀の本願によりて成佛なされた諸佛が彌陀の本願で佛になられた故南無阿彌陀佛は疑ふに及ばぬ、御和讃に淨土を疑ふ衆生をば無眼人こそなつけたる無耳人ごとのへたまふと、御誠めなされた何れの佛も何れの佛も南無阿彌陀佛で佛に御成りなされたことすれば、天地が變りても彌陀の本願に詐偽はない、爾るに今日まで疑ふ間敷本願を疑ふたことは誠に申譯けのないこと、愈々善智識の御化導の下で聞て見れば願も入らず、行も入らず其機となりて、吾れをたのめ必ず救ふと呼で下さる本願招喚の勅命が御鹿末心の中へ被

られた有の儘二心なく後生御助け候へど彌陀一佛をたのみ奉る立處に往生の大事満足なさしめて頂くは全く他方回向の御手柄である先づ、

第廿八回 道也

命に付て八訓ある中、前回までに教也とある思召を話した、只今は道也とある御意を取次ぎ申す、そこで道也とある道とは、みち、と云ふことで、因道より果道に通するので凡夫より佛になる道が命の字に當るのちや、そこで、前回に一佛一切佛と云ふことに付て彌陀の他に諸佛なく諸佛の他に彌陀なし彌陀即諸佛ちやで、吾れをたのめ必ず救ふと仰るは阿彌陀如來ばかりぢやない、十方恒沙の諸佛が口を揃へて此本願を信せよと御教へ下さるゝと云ふことを話したが

只今道也とある思召も同じことで、藥師如來の道中も寶性如來の道中も只一筋である、夫れは如何なる道かと云へば華嚴經に十方無道人一道より生死を出すことある、其道とは曇鸞大師は論註下卷に一道と云ふは無導道なり無導道は生死即涅槃なりと仰せられて之れが諸佛の佛に御成りなさる道である、處で其生死即涅槃の道は如何なる道かと云へば、御和讃に往相の回向と云ふことは、彌陀の方便さきいたり悲願の信行いしむれば生死即ち涅槃なりと御示しなされた、悲願の信行と云ふは悲願は第十八願信行は至心信樂欲生の三信が信乃至十念が行でありて悲願の信行と云ふは第十八願のここ、此第十八願が生死即ち涅槃の道ぢやそこで、此第十八願は如何なる譯けて諸有諸佛が證りに至る道かと云へば同じく和讃に本願圓頓一乘は逆

惡攝すご信知して煩惱菩提體無二ごすみやかにごくさごらしむごありて、本願圓頓一乘ご云ふは本願ごは、第十八願圓頓ごは圓は圓滿の義で欠け目のないこと、諸有善根功德が第十八願に具はりてありて漏るゝことがない、願は願極願速ご云ふて、聖道門では三大阿僧祇の永の道中をせねは佛になることは出来ぬ、けれども彌陀の本願は、たのむなり、御助けに預り信するなり往生定まる故に南ごも無ごも口に顯はさぬ先きに佛になる、ここに定まる故、之より早いこと此上ない一乘ご云ふは法華經に唯一乘法無二亦無三ご仰せられて、佛になるは一筋の道ぢやごある、華嚴經に十方無導人一道より生死を出づごある、一道が法華經の一乘に當る、して見れば華嚴も南無阿彌陀佛法華の一乘も南無阿彌陀佛でありて、此南無阿彌陀

佛で佛になるのぢやで、華嚴經も法華經も南無阿彌陀佛の他にないご仰せらるゝのぢや、逆惡攝すご信知してごは逆は五逆惡は十惡でありて、三世法界に受け取りてのない、惡人を引き受けて下さるは彌陀の本願なりご信知せりご仰ること、煩惱菩提體無二ごすみやかにごく、さごらしむごは煩惱ご菩提ご體が一つご證ることぢや、之れを御開山は御和讃に解り易く御示し下されて、無導光の利益より威德廣大の信を得て必ず煩惱のごほりごけ、すなはち菩提の水ごなるごありて氷のごけた其まゝが水でありて形ちは違へごも、體に二つはない、故に氷が其儘水である、吾々の煩惱の氷のごけた其儘が菩提である、其煩惱の氷のごけ鹽梅を蓮如上人は御文に、無始已來つくりごつくる惡業煩惱をのころごころもなく願力不思議を以て消

滅するいわれあるが故、正定聚不退の位に住すとなりて、御教へなされた、夫れは何時消滅するかと云へば十劫の昔しちやと、すまじて居るでもなく、臨終の夕べを、あがなくと待つちやない、南無と歸命する一念の處に發願回向の心あると仰るからは、只今善智識の教の下で本願の御理り聞き開かれた有のまゝ、二心なく彌陀一佛をたのみ奉る、立處に往生の大事満足するのである先づ、

第廿九回

信也

命の字に付て信也と仰る思召を取次きに及ぶ、信とは信心の信の字である、處が此信の字を命の字に御付けなされたは誠に合點の行かぬところで古來いろく説が澤山に分れてあれども、其説を一つく並べる必要もないと思ふから、此澤山な説の中で自分が最も有り難

いと思ふ説を御取次き申す考へちや、そこで信也と仰る思召は信心の信なれども之れは音信と通じて、をとつれ、と云ふことで阿彌陀如來の方より吾々に音信して下さる、之れが即ち命の字の意ちや、音信を受けたときははいやでも行かねばならぬ、其音信も地獄から來たちやない、阿彌陀如來の御淨土から來たのちや、して見れば是非參らせて頂かねばならぬところや、聖德太子が「いそげ人彌陀の御ふねの通ふ世に乗りおくれなは誰れか渡さん」と仰せられて極樂から大きな船が通ふて居る故に急いで乗れよと云ふ思召でありて、彌陀の御船の通ふ世と云ふは何時までも通ふのかと云へば彌陀の御船の通ふ世は吾々の命のある間のことで、火葬場より彼方は通はぬと云ふところや昔丹波の龜山に二階堂某と云ふ人が豫ねて、一休和尚

に何卒私が死ぬと引導を授けて頂き度いと願ふて置かれた、するご
 一休和尚は、よろしい、ご受合ふて居られたから此二階堂某が喜ん
 で其事に家内を話して居た、其後此二階堂某が病氣の爲めに死んだ
 から、家内の者は急いで京都へ使いを立て一休和尚を御迎ひ申して
 何卒主人二階堂某が豫ねて御たのみ申して居りました通り引導を御
 願ひ申すご一休和尚は直くに承知して、夫れから棺に向ふて誰れか
 金槌ちを以て来いと云ふて其金槌ちで亡者の頭を割れる程打つて其
 儘あちらへ行きて仕舞れた、するご家内の者は怪んで其譯けを尋ね
 るご、一休和尚の云はるゝには、されば只今お前達も見た通り、金
 槌ちで頭を打つたけれごも、何の返事もない、最早や死んで居るか
 ら空家に向ふて物を云ふても駄目である、ご云はれたご云ふことぢ

や、今彌陀の御船の通ふも命ちのある中ぢや、併し命のある中なら
 大丈夫と思ふて長綱つけるご失敗ぢや、長命する人はかりを見て居
 れは、自分はまだまだ死なぬ様に思ふけれごも、後ふりぬへりて見
 れば自分より若い者が澤山死んで居るぢやないか、五年後に死ぬご
 か、十年後に死ぬご云ふ決りがあれば善いか無常ははかられぬもの
 で、明日死ぬやら只今下向の道で倒れるやら判らぬ、實に無常迅速
 の者である、して見れば油断は出来ぬ、彌陀の御船の通ふ世ごあれ
 ば氣樂な様に思ふても決してさうぢやない、定命は、はかるごごが
 出来ぬ、源信和尚の御妹公に安養尼ご云ふがあたりた此御方が或時兄
 の源信和尚に御對いなされて無常を觀するには如何したら宜しから
 んご御尋ねなられた、するご源信和尚は四季の變遷を見よご、御答

へなされた、之れは如何にも尤もな話である、花咲き揃ふた春の日も何時しか過ぎて、夏となり夫れや何時の間にもやら青々茂りて居た木の葉も秋の霜に遇い風に吹き散らされて早や雪降る冬となりて仕舞ふのは實に速いものぢや、處が安養尼は誠に、ゆらい御方でありて女ながらも一代經を二度まで讀まれた御方であるから、此源信和尚の御答を御聞きなされて、出づる息は入る息待たぬ世の中に愚かに君はまごいぬる哉と四季の變遷位を見度にする云ふことはない、と兄の源信和尚を御異見なされた云ふことがある、爾るに吾々は今日聞かねば明日にする云ふ様な聞きぶりをして居る故に、聖徳太子は御催促あらせられ、彌陀の御船の通ふ世に急いでよ、今に船が出て仕舞ふぞよ乗り遅れては大變である故に只今未來を旅立

ちをする覺悟で頂けよと仰せらるゝことである、さて頂て見れば、得難いことのあるのぢやない、根機相應の御教でありて無善造惡の私に善根つめども仰せられず、功德を修せよとも仰せられず、生れ付きの其儘で吾れを頼め必ず救ふの御意一言が御鹿末な心へ被られた有の儘、後生御助け候へと彌陀一佛をたのみ奉る、立處に往生の大事満足なさしめて頂くのである先づ、

第三十回 計の也

命の字に入訓ある中、第七訓目に計也とある思召を取次に及ぶ、計と云は、御和讃に釋迦彌陀は慈悲の父母、種々善巧方便し、吾等が無上の信心を、發起せしめ玉いけり、とある善巧方便が計と云ふことぢや、吾々は智慧の眼がない故に私に佛の形ちてない、吾等を濟

度して下さらぬ様に思ふけれども、決して左様ぢやない、いろくご相た形を代へて、吾々に出離に大事をこゝろかける様に御手廻しをして下されることぢや、和光同塵は結縁のはしめ、八相成道は利物のおわりとある、八相成道は利物のおはりとは佛が佛の相たて衆生濟度なさること、和光同塵は結縁のはしめとは、彼方の光明赫々の御相たを、吾々に御見せ下さること縁なき衆生は近づき悪いことがある故、光明を塵介にかくし、吾々と同じ相たで御苦勞なさることぢや、聖徳太子御年二十七歳の御時に黒駒に乗りて三日三夜の間日本國を御巡りなされて熊野の權現へ御出なされた時に權現か太子に向ふて云はるゝには、衆生が佛法に歸して渡世を願へは神の心に叶ふけれども、衆生は後生を願はず子孫繁昌を祈り、或は現世の壽

福を求めて菩提をねかはす、出離の大事を心に叶はず、世間のことばかりを祈り一旦の名利にかゝはりし居ること云ふて大層悲まれたこと云ふことぢや、然らば何故に衆生の願を御聞きなさること云へば衆生に縁を結んで遂に西方の淨土へ往生させたいはがりに嫌なことを聞いて御苦勞し下さるゝ、其御心の程を付ねばならぬ、佛や菩薩が本體の儘で顯はれなされたならば氣が付けごも、彼方の手前を知ることは出来ぬ、維摩經に吾々を濟度して下さるゝ手段が四つありて一に布施、二に愛語、三に利行、四に同事、第一に布施と云ふは物を施すことで欲の深い者の後生ごも菩提ごも氣の付かぬ者に物を施して遂に佛法に引き入るゝ、第二に愛語と云ふは、短氣を瞋恚の強い者にはやさしくして佛法に引き入れて下さるゝ、第三に利行と云ふ

は、吾々の所作で彼れは儲かると思ふで働ても直に其處にあるものが手に取れぬ、一丈のものは九尺まで行きて一尺の處で失敗をする其様な所を手傳いをして或は女房となり、子となりて其儲口を手傳いしながら佛法に引き入る、第四に同事と云は姪婦の爲に姦夫である、或は罪人を救ふ爲めに同じく罪人となりて、其者を佛法へ引き入て下さるのちや、法然上人が御流罪に御成りなされた時に神崎に一人の傾城がありて夫れは常の人の目から見れば當前の傾城でありたが、法然上人が御覽なされたら普賢菩薩でありたと云ふことである、此の如くいろ／＼と本願に引き込む様に御苦勞下され、吾々に氣が付かぬとも前よりは引ても見たり、後から押して御骨折がありたもの故、後生とも菩提とも氣の付かなんだ私が出離の大事がこゝ

ろにかゝり、愈々善知識の教の下へ出て聞けば、其機の儘でありながら吾れを頼め必ず救ふとある、本願招喚の勅命を心の中へ被らしめ貰ふた有の儘二心なく、後生御助候へと彌陀一佛を頼み奉る、立處に往生の大事満足なさしめ頂くは偏に他方廻向の御手柄と喜び、報謝の不行

第卅一回 召也

命の字に付て八訓ある中、第八訓目に召也とある御言を取次に及ぶ召は思召と云ふことで、御開山が銘文に歸命と云は、釋迦彌陀二尊の勅命にしたかひめしにかなふとまふすことばなりとある、そこで釋迦彌陀二尊の仰にしたがひ召に叶ふと仰るは只今の命の字の御字訓に當て見ると第四番目に教也と仰るは前に咄じた如く、此教也

云ふは賢首大師の起信論義記に命は諸佛の教命とありて、命とは諸佛の仰せと云ふこと、御傳抄に法然上人が選擇集を御製作なされたは如何なる縁によりて、御製作なされたかと云へば月輪殿下の教命によりて御製作なされたのちや、あの教命と云ふ文字は教命とある、そこで文字は教命でも教命と讀むのは月輪殿の仰によりてと云ふこと、然れば二尊の仰とあるのは、命の字に八訓ある中第四番目の教也とあるに當る召に叶ふとあるは八訓ある中只今の召也とあるに當る、然れば尊號眞像銘文の上にしたかふと云ふ御言と叶ふと云ふ御言と二つあるが、之れは歸命の御字訓の中何れに當るかと云へば歸悅也歸稅也とあるに當る之は豫て聽聞の通り、ヨリタノミ、ヨリカ、ルとある、して見れば釋迦彌陀二尊に順ひぶり叶塩梅はヨリ

タノミ、ヨリカ、ルのちや、そこでヨリタノミ、ヨリカ、ル塩梅に付て如何して頼むのかと云へば、其頼み鹽梅を御教へなされたが蓮如上人である、御文に歸命と云ふは衆生の後生助け玉へと頼む心ちやとある、尊號眞像銘文に仰にしたがい召に叶ふとあれども何と心得て順ふのやら、叶ふやら判らぬが、行卷から頂て見るに本願の御理りにヨリタノミ、ヨリカ、ルのが召に叶い仰に順ふたのちや、其頼み鹽梅を何と頼むのやら判らぬが蓮師は後生助け玉へと頼むのちや、と御教へ下されたが中興の御勳功である、蓮如上人は御幼少の時は布袋丸様と申上げたが、御年六歳のとき母公に御分れなされた其時に御母公は枕邊に布袋丸様を近く呼でちやが一生に淨土眞宗を再興あれかしと御遺言なされたが、吾々の子供なれば六歳や七歳

の頃は腕白盛りで母の云ふことなどは耳にも入れぬが流石は中興上人と御成りなさるゝ御方程ありて、幼心に夫れを御聞きなされ肝に銘じて御學問あそばされ、浄土真宗を再興せんご長々御苦勞された其御手柄は頼む一念の處を詳に御教へなされた、御一代聞書に聖教の御流は頼む一念の處肝要なり、故にたのむと云ふことをば代々あそばしをかれ候へとも委しく何ごたのためと云ふことをしらすりき、爾れは前々住上人の御代に、御文を作られ候ひて、雜行をすて、後生助けたまへご、一心に彌陀を頼めごあきらかにしめされ候、爾れば御再興の上人にてましますものなり、ごありて蓮如上人が浄土真宗御再興の御手柄は頼む鹽梅を御懇に御示しなされて、一心に彌陀一佛を頼みたてまつる心が本願の約束通りちやで、修行戒行せぬもの

が、本願信する立處に往生の大事満足なさしめて頂くのが浄土真宗他力廻向の御教である、先づ、

第卅二回

本願招喚之勅命

是以歸命者本願招喚之勅命也と云ふは常々同行中も聽聞して居るが去りごて肝要なご故一通りは御取次に及ぶ、大體此歸命と云ふごは頼むごごである、頼むごごはすれば、これは行者の能信でありて決して勅命ぢやない、能く考へて見られよ、其能信を指いて勅命ご仰るは如何なる譯けであらふかご云へば信卷に煩生我國を御教なされて言欲生者則事如來招喚諸有群生之勅命ご仰られた、爾れば此欲生我國を勅命ごあるは第十八願の三信をは南無阿彌陀佛の六字に配當すれば至心信樂の意は南無二字、欲生我國は阿彌陀佛の四字に

當る、夫で行卷では南無の二字が勅命となり、信卷では阿彌陀佛の四字が勅命となりてあるは妙ぢやないか、南無阿彌陀佛を二字と四字に分れば、二字は頼み四字は御助け故、四字が勅命と云ふは當前なれど、二字を勅命と云は、爰が善導大師の六字くの御扱である、南無の二字も六字、阿彌陀佛の四字も六字である故、何れも六字である、さすれば二字も勅命、四字も勅命である、處が此歸命の二字が六字になると云ふ、次第は如何なるものかと云ふに、此二字を分れば、命に歸すると云ことで、命とは勅命、歸すると云ふは勅命の通りになるのちや、夫故歸命の二字を六字に配當せば、歸は南無の二字、命は阿彌陀佛の四字に當る、故に歸命と云は頼むと云一言の様なれど中を解て見ると六字である、夫れ故、只今歸命の二字を指て、勅命ぢやと仰られた、さて此歸命を分けて、六字とせすに單に二字計りて行者の能信ぢやと云へば勅命でないかと、申すに矢張り勅命ぢや、夫れは如何なる譯ぞと云ふに豫て申す如く、頼む心は御助でありて、彌陀一佛を頼み奉るは凡夫が起したのぢやない彌陀の頼むものを助ふの届た儘が彌陀一佛を頼むのぢやで、此以歸命と云は本願招喚之勅命也と仰るので、行者彌陀を頼む心は彌陀の仰の届た儘故、頼む心の外に彌陀の勅命は無い夫れ故、無善造惡の私か疑ひなく計ひなく、一心に後生御助け候へと彌陀一佛を頼み奉る覺悟は私の考て出來たのぢやなひ、如來の眞實一様が御粗末な心の中へ至り届て下された故、疑い深い私が二心なく彌陀一佛を頼むは、たのぢも私し信するも此身なれども、少も自力こゝろは寄り添

字を指て、勅命ぢやと仰られた、さて此歸命を分けて、六字とせすに單に二字計りて行者の能信ぢやと云へば勅命でないかと、申すに矢張り勅命ぢや、夫れは如何なる譯ぞと云ふに豫て申す如く、頼む心は御助でありて、彌陀一佛を頼み奉るは凡夫が起したのぢやない彌陀の頼むものを助ふの届た儘が彌陀一佛を頼むのぢやで、此以歸命と云は本願招喚之勅命也と仰るので、行者彌陀を頼む心は彌陀の仰の届た儘故、頼む心の外に彌陀の勅命は無い夫れ故、無善造惡の私か疑ひなく計ひなく、一心に後生御助け候へと彌陀一佛を頼み奉る覺悟は私の考て出來たのぢやなひ、如來の眞實一様が御粗末な心の中へ至り届て下された故、疑い深い私が二心なく彌陀一佛を頼むは、たのぢも私し信するも此身なれども、少も自力こゝろは寄り添

はず全く他力廻向の所爲である先、

第卅三回

如來已發廻施衆生行之心也

言誓願回向者如來已發願廻施衆生行之心也。仰る思召を御取次に及ぶ、ソコデ御開山は此發願回向をは二ヶ所に御釋なされてある、夫れは、銘文の上では亦是發願回向之義。云は二尊のめしにしたがふて安樂淨土にむまれむこねかふこゝろなりこの玉へるなり。仰られた、之は古來説は澤山あれども、先づ私が信じて居る説を話す。行卷は發願回向を法に約して御釋なされ、銘文では機に約して御示しなされた、二尊のめしにしたがふて安樂淨土にむまれむこねかふこゝろなり。こありて、二尊の召に順ふた、其順ひ心を云は、安樂淨土に生れんと願ふ心なり。こある、之れ古來行者の能信の上に願心が

ある。云ふことを嫌ふ者もあり、又願生にならぬかこ心配すれども私は確かに申て置くが、之れ決して心配は入らぬ、二尊の思召が届たれば自から淨土へ生れ度と願ふ人が起るのちや、近く譬て云へは祭にならぬ前きから母親が娘の嫁入先きへ行きて何月何日は祭でありますゆへ、皆さんも何卒御出下されと、口には云へこ心の中は娘に來てほしいのちや、其證據はイヨ／＼祭になるこ夜の明けぬ先きから待つて居るが十時か十一時になりても未だ來ぬときは母の心の中はドーであらふが、何ぞ家に差支でも出來たか若しや病氣ではないか、最早や來さうなものちやと、他人は何ても娘の顔を見ぬ間は祭とは思はず、玄關口を出たり入たりして待つて居る、其母の心が娘の心へ届て居る故娘の方では早く祭りに行き度／＼と思ふて居る

夫れが母の早く来てほしい心が娘の心へ届た故、早く行き度く、こ
 思ふ、今釋迦如來は早く浄土へやり度いと思召され、阿彌陀如來は
 十劫の昔から惡人女人を待て御出なさるゝ、其眞實一杯が心の中へ
 被られて見れば、行き度くと思ふものはない、二尊の召に順ふて
 浄土へ生れ度と思ふに違ない、此心がさりもなほさず、他方回向の
 なしわざである故、善導大師は眞實心中に回向し玉へる等と仰られ
 て、彌陀如來の思召を脇きへ除て出しかけたのぢやない、願ひを願
 へて得生の想になりたのぢや、其有様を銘文に示し玉ひて即ち機に
 約する方である、只今發願回向と云ふは、如來已に發願して衆生の
 行を廻施し玉ふの心なり、御示しなされたのは約法の方で、之を一
 言に云へば、阿彌陀如來が吾等に向ふて下さるゝ眞實一杯を御出し

なされたのぢや、如來已に發願して衆生行を廻施し玉ふの心なり、こ
 は、已にと云ふは阿彌陀如來が因位に於かせられ、世自在王佛の所
 に於て四十八願を起させられたが、已に發願と仰るのぢや、衆生の
 行を廻施し玉ふの心と云ふは、永々の間諸苦毒中我行精進忍終不悔
 と毒の中も御厭いなく、炎の中も御厭いなく御苦勞なされて御拵へ
 下された、南無阿彌陀佛を衆生の行と仰るのぢや、全體阿彌陀如來
 が御拵へなされた南無阿彌陀佛である故、如來の行この玉ふ筈ぢや
 爾るに阿彌陀如來が拵へながら衆生が貫はぬ前から衆生の行と仰る
 は、如來の眞實一杯をふり出した御言ぢや、母が反物屋の店で澤山
 な反物の中から之れは縞柄が良いとが彼れは悪いと云ふて選ひて
 買ひ求めた反物を誰れの反物かと、問へば之れは娘の着物ぢやと、

答へるに違いない、自身が選んで買求めた反物故私の着物ちやと答へる筈ぢや、爾るに娘に與へぬ先きから娘の着物と答へるは娘に與へる爲めに買ふた品故、娘の着物と答るのちや、只今も夫れと同じく阿彌陀如來が世自在玉佛の店先まで二百一十億の諸佛の淨土を御覽なされ、其中から選び取せられた四十八願、之を満足する爲に永世の間御苦勞ありて、御求めなされた南無阿彌陀佛は阿彌陀様が御拵へなされた故、如來の行と仰しやらねばならぬ筈ぢや、爾るに衆生が賞はぬ先きから衆生の行と仰るは南無阿彌陀佛の御小袖は、阿彌陀如來が着る爲ぢやない、惡人女人に着せ度爲に御拵へなされた六字故、衆生の行と仰るのちや、此御實に一抔が心の中へ至り届て下されて見れば二尊の召に順ふて安樂國へ参へり度と思ふに違ない、無善造惡の私が往生一定御助け治定の覺悟となり、参らぬ先きから早や彌陀の淨土へ近づくを待つ様になりたは偏へに他方回向の御手柄なれば、報謝の太行か何より肝要、

第卅四回

選擇本願是也

言即是其行者即選擇本願是也と仰る思召に付て、御取次に及ぶ、之れは善導大師が通論家の人が唯願無行と云ふて、願があれば行はない、觀經の下々品の者は佛に成り度いと云ふ願はあれども、佛になる行がない、喩へば本山へ参詣し度と云ふ願いはあれども、参る路金がない、夫故参る度と思ふても金がないければ参ることは出来ぬ下々品も夫れと同じことで、淨土へ参り度い願はあれども行がない夫れ故順次の往生は出来ぬと云ふ、夫に對して善導大師は下々品の

行者には路金が澤山ありて一聲稱ふる念佛には願行具足してありて十聲の念佛には十願十行ある故、願がありて行がないと云ふことはない、南無は願なり阿彌陀佛は行なり、斯義を以ての故に必ず往生を得るに間違ひなしと云ふことを顯す爲に即果其行と仰られたのちや、其行と云ふは如何なる行かと云へば、御開山は選擇本願是也と仰られて、選擇本願と云ふは汎く云へば四十八願約めて云へば、第十八願である、選擇とは正依の經では攝取とあり、異譯の經では選擇とありて、言は違ふけれども御意は同じことらや、御開山は御和讃に超世無上に攝取し、選擇五劫思惟して、光明壽命の誓願の、大悲の本とたまへり）と仰られた、之れは二百一十億の諸佛の淨土より粗より妙を取り、往生の因には難行をすて、易行を取り、劣を

捨て勝を取りた處計りを取りなされたので、諸佛の淨土は布施の行を積みたものでなりねば生ることが出来ぬのもある、併し欲の深い吾々は布施の行は出来ぬ、又戒行を持た者が往生する淨土もあれど一日に二度の御内佛の御給仕ですら出来兼ねる者は行かれぬ、又忍辱の行で往生する淨土もあれど、人が手を振り擧げぬ先きから腹を立てる様な者は參ることは出来ぬ、或は禪定の行で參る淨土もあれど吾々の心は靜まることはない、五分間か十分間でさへ心の亂れる様な私には座禪は出来ぬ、或は精進の行もあれど吾々の懈怠な者は勤まらぬ、或は波羅密の行もあれど半枚か一枚の書物さへも解するこの出来ぬ者は到底及ばぬ、故に阿彌陀如來は超世無上に攝取し、選擇五劫思惟して終に諸行を捨て、念佛の一行を往生の因になされ

た故、選擇本願と仰らるゝのちや、御互の吾々は何時戒行持つた覺もなく朝飯前の修行をした試のないけれこ、萬善萬行恒沙の功德を撮めなさせられた南無阿彌陀佛で往生こげ奉るのちや、蓮如上人は御文の上に南無阿彌陀佛は萬善萬行の總體と仰られた、吾々は今日まで南無阿彌陀佛の値打が知れなかつたものちやで、自力の小刀細工を使ふたけれこ、愈々南無阿彌陀佛の御手柄が知られて見れば、小刀細工を容れるぢやない、無善造惡の私、火坑へ墮つるより仕方のなき者を助け玉へるは、彌陀願力の御不思議ぞこ、信知の一念に南無阿彌陀佛を與へまします故に、なさぬ功德の主となり、昨日今日只今まで、三塗へ影身の映した私が、彌勒菩薩の先き駆けして安養淨土の往生こは何たる廣大な御恩ぞこ喜ひく報謝の太行、

第卅五回

選擇本願是也こは選擇と云ふは、選も擇も共に選ぶと云ふことこで、選ぶと云字を二字重て御使いなされたは如何と云ふに、之は選ひ捨て選び取るこ云ふことこちや、言を換て云へば廢立の本願と云ふことこで雜行すて、彌陀一佛を頼み奉る心が選擇本願である、今此起りに付て取次に及ぶことこちや、阿彌陀如來が此選擇本願を御立てなされたは何の爲めかこ云へば選擇こは言を換へ云へば廢立爲正で廢立爲正こは、他力廻向の本願である、阿彌陀如來が因位に於て二百一十億の諸佛淨土を世自在王佛に飾り立て、見せて御貰いなされた、爰が一寸判らぬ處であるが、様子を知らぬこ合點が行くまい、那是かこ云に法藏菩薩が世自在王佛に御遇いなされた時は菩薩でも、五十

二段ある中何段目の位か云へば論註の上で見れば聖種性と云ふ位である、之れは五十二段の中では十地の中の第八地の不動地でありて四十八段目である、さすれば四十八段の菩薩は途方もない立派なもので初地の菩薩でさへ飯喰へる間に十萬億佛土の諸佛に供養して廻ることが出来る云ふことちや、飯喰へる間に三里行く云ふことがあれども、夫れ位ちやない、初歡喜地の位でさへ大變なものちや、さて其菩薩の一地くの違目は何程か云へば、初地の菩薩は二地の菩薩の擧足下足を知らずとありて、一段上の菩薩の足の上へ下けさへ分らぬ云ふことちや、して見れば初地の菩薩ですら、十萬億佛土を喫食中にめぐる用きがあるもの、況や法藏菩薩は八地の菩薩ちや、然れば自由自在に据て居て二百一十億の諸佛の淨土を見る

ここは何でもないことちや、然るに何の爲に世自在王佛の厄介となりて諸佛の淨土を御覽なされたか云ふに、此れが他力を顯して下されたのちや此法藏菩薩の智解の分は自在王佛固より御存知ちやで、汝自當知と仰られた、之は御前が自ら知れ云ふことである、然るに法藏菩薩が斯義弘深非我境界と御辭退なされたは爰が他力でなければならぬ云ふことを顯はされたのちや、さすれば何處までも行き届た御骨折である、此の如く阿彌陀如來は因位の初めから他力でありて世自在王佛の所で諸佛の淨土を御覽なされて粗末な處は選びすて、善い處を選び取り難を捨て易を取り劣を棄て勝を取り諸行は劣りて難い、念佛の一行は勝れて易い、無善造惡の私が、之を修するに修し易く、之を持つに持ち易き南無阿彌陀佛を御與に預り、

之を稱ふるには佛前で稱へよと仰るでもなく、珠數をかけて稱へよでもない、御粗末な床の中でも御恩報謝の勤まるのが南無阿彌陀佛の六字である、此南無阿彌陀佛を我等が頂たればこそ枯木に花の咲く様な仕合を得て、此南無阿彌陀佛を與へ玉へるには、吾を頼め必ず救ふの御一言被られた相たは、雜行すて、後生御助け候へ彌陀一佛を頼み奉る立處に往生の大事満足なごしめ頂くは全く選擇本願の御手柄ぞと報謝の不行

第卅六回

彰獲至不退位

言必得往生者彰獲至不退位也と仰らる、思召は、此不退と云ふに付ては往生要集下末には四種不退あることを教へてあれども今は其要たるものを判り易く云へが三通りある、一者位不退、二者所不

退、三者信不退である、第一者位不退と云は菩薩が修行をして後ご戻りもせぬのが位不退である、之れに付て位不退の立て處が幾もあるが、法華では十信、十住、十行、十地、十廻向、等覺、妙覺と此五十二段の中で、十住の位の第七番目が位不退である、同行中も知りて御座らうが、舍利弗は本ご大乘の菩薩でありたが布施の行をしつて御出なされた時に、乞眼婆羅門に御會いなされた處が其乞眼婆羅門が、舍利弗に云ふ様には、あなたの眼の球を見るご如何にも奇麗であるから何卒私に下されと云ふた、するご舍利弗は眼珠を切り取りて御與へなされたが、乞眼婆羅門は夫を受取りて何ご之れはキタナヒものぢや、今迄で御前の目の中にありたごときには如何には奇麗に見へたが、貰ふて見れば如何にもキタナヒものぢや斯様なものは

入らぬと云ふて、大地へ抛出し足で踏み漬した、するに舍利弗は心の中に思ふはるゝには嗚呼何んぞ情けないことぢや、私の處にあればまだく役に立つ者を、大地に抛け附け踏み漬した爲に何の間に合はぬと恨まれた、夫が爲に修行が後戻りして仕舞ふた、舍利弗は其時の位が第六位でありた、之れが第七位であれば後ごりになさらぬのぢや、然るに、御互の我々は如何にも幸なことで修行も入らず、戒行も持たず、善智識の言の下で本願の御理りを信じた其時が不退の位ぢや、聖道門の修行をなさるを見るに付けても喜ばねばならぬ、さて次に所不退と云ふは場所が退かぬ所ぢや、大經の東方偈に其佛本願力、聞名欲往生、皆悉到彼國、自致不退轉とありて皆悉く彼の國に至りて自ら不退轉に致すと云ふことで極樂へ參れば

不退になると云ふのぢや、之れに付て現世の不退と彼土の不退とあるが只今の文の上では彼土不退で極樂へ參れば戻らぬ處と云ことぢや、佛說大乘無量壽佛莊嚴經に淨土の土徳を説てありて位退轉せずとある、此娑婆は佛道修行をしても兎角後ごりをする、此事は般舟三昧經にも起信論にもありて、菩薩の論も同じことぢや、般舟三昧經に祇陀和菩薩に對ふて佛になるには一行三昧を修せよとありて此娑婆は佛道修行をするには都合が悪い那是と云ふに、坂に車を押す如く、少し手本があるむと直に後ごりをする、夫れは那是と云ふに目に見ては煩を起し耳に聞ては腹を立て、心には愚痴を起し夫が妻を地獄へ連れ行く様にする、妻は夫を修羅道へ行く様に丁度難船に逢ふた如く少し泳ぎを知りて居るものが泳を知らぬものに繋

かられて引込まれて仕舞ふ、此處では迎も佛道修行は出来ぬ、そこで平地を車を押せば一尺押せば一尺進み、一丈押せば一丈進んで後戻りのせぬのは、彌陀の淨土ちやと釋迦如來が御教へなされた、處が跋陀和菩薩が然らば彌陀の淨土へ往生して修行を仕度いと思ひますが、ドーして行くことが出来ますかと御尋ねをされた、すると釋迦如來は阿彌陀如來に問ふたがよいと御答へなされた、ソコデ阿彌陀如來は何と御答へなされたかと云へば念我稱名と仰られた、之れは誠に大切なことであるぞ、念我と云ふは至心信樂欲生、稱名とは乃至十念のことで阿彌陀如來の第十八願は我々凡夫斗りぢやない、彌陀の淨土へ参るには菩薩でも此通りぢや、馬鳴菩薩の起信論の終りにも初めに聖道門の修行を御教へなされて、其聖道の修行が速に成

する勝方便ありと御示しなされた、勝方便とは近道と云ふこと此近道は何かと云へば、彌陀の淨土へ参るのが近道ぢやとある、夫は那是と云ふに彌陀の淨土は不退の土徳がある故、後戻りせぬのぢや、之れが所不退である、第三に信不退とは信心が後と戻りせぬと云ふことで十九二十願の信心は兎角後と戻りするのぢや、那是と云ふに自身の所作を頼にして居る故に行の勤まること往生占めたこと喜び念佛の稱へられぬときは往生如何と思ふて兎角信心が定りてないのぢや、善導大師は蒙光觸者心不退と仰られて第十八願の信心は後と戻りをせぬ、那是と云ふに阿彌陀如來の光明の中に居る故に後と戻りをせぬのである、蓮如上人は我が計にて地獄へも墮ちずして極樂に参るへき身なるが故なり」と仰られて一度本願の御理りを被らせ

て貰ふた有の儘二心なく彌陀一佛を頼み奉る立處に往生の大事満足
なさしめ頂き往生一定御助け治定の覺悟になさしめ貰ふものぢやで
機まがの善惡ぜんあくに目をかけず粗末せまつな心が見れば見ゆる程反りて本願ほんがんの尊たよさ
を知られ、斯かる無善造惡むぜんぞうあくの私わたくしを御助け下さるは天てんにも地ちにも彌陀一
佛ぶつぞと喜よろこひく報謝ほうしゃの不行だいまう、

第卅七回

經言即得釋云必定

言こと必得往生ひつてくわんじやうせいよは者彰あき獲とく至いた不退位ふたいゐ也經言きやうごん即得釋いつてくわんじやうせいよは云い必定ひつてくわんじやうせいよは即言いつごん由聞願よきき
力ちから光闡報くわうけんぱう土真どしん因決定いんけつじやう時尅極促じこくごくそく也必言ひつごん審しん也然也なり分極也ぶんごく金剛心成就こんごうしんじやうじゆ之
貌也ぼうなりと仰たつしやる御化導ごけだうは御言ごごんは長い故委ゆづりく話はなし度たいと思おもふけれご今日こんにちは
少すこしく急いそぐ要事やうじが出来た故大體ごうたいに付つて御取次ごていしに及およぶ、ソコで善導大ぜんだう
師しは必得往生ひつてくわんじやうせいよはと仰たはされたは釋迦如來しやくかたよらいの願成就くわんじやうじゆの經文きやうもんに配當はいたうせば、即すく

得往生住不退轉てくわんじやうせいよはふたいてんの御意ごごいである又龍樹菩薩りゆうじゆぼさつの易行品いぎやうひんには即時入必定すくじにふつてくわんじやうせいよはと
仰たつしやる、善導大師ぜんだうだいしは其言そのごんを承うけて必得往生ひつてくわんじやうせいよはと仰たはされたのぢやとあるのが
只今ただいまの思召おぼしめしである、之れを今一返分いまへんぶんり易やすく云いへば必得往生ひつてくわんじやうせいよはと云ふは
往生わんじやうせいよは間違まちがないと落ち付けよこのことぢや、釋迦如來しやくかたよらいが即得往生すくじにふつてくわんじやうせいよはと仰たは
るも龍樹りゆうじゆが即時入必定すくじにふつてくわんじやうせいよはと仰たはせるのも永世わうせいの間あいた案あんし煩わづらふた後生ごしやうの一大だい
事じを佛ぶつの方かたより往生わんじやうせいよはは治定ちぢやうせしめ玉たまふと落ち付けよこのことぢや、
ソコで必ひつの字じは僅わずかか一字いちじなれごも誠まことに遠とほい處ところから來た文字もんじでありて
其源そのみなもとは大經だいきやうの三誓偈さんせいげの初はつめに我建超世願がけんてうせいぐわん必至ひつてくわんじやうせいよは無上道むじやうだう斯願しやくわん不満足ふまんじやく誓不成せいふじやく
正覺しやうかくとありて、之これが必ひつの字じの一番源いちばんみなもとぢや、訓くんで讀よめば、我われ超世てうせいの
願ぐわんを建たて必かならず無上道むじやうだうに至いたらん、斯願しやくわん満足まんじやくせずは誓ちかいて正覺しやうかく成ならずと云
ふこと、必かならず無上道むじやうだうに至いたらんとは私は屹度きつてく證まりまに至いたると云ふこと

ちや、之れは中々大きい話して四十八願の其中に一願々々に彼方の正覺が質に御入れなされたので、夫れも一度ならず二度ならず、正覺の御命や四十八返まで底當に入りてある、して見れば必ず無上道に至らんご仰るは云はずと知れた四十八願急度満足するに間違ないご云こごちや、吾々のすることなれば、初に望んだことは半分も成就せぬが、法藏菩薩の仰ることには、成るか成らぬかご云ことはな何處までも満足まずば措ぬご仰るのちや、夫れも法藏菩薩ばかりで仰るならば出来るか出来ぬかご云ふ疑いも起れご此四十八願が終りて三誓偈文の後に真中讚言決定必成無上正覺ごありて相た形ちは見へぬごも、真中に聲ありて法藏菩薩が前々より誓ふた四十八願満足して必ず佛になるに間違ないご仰られた、之れは、御開山の愚禿

抄の御指南より頂て見るご真中讚言ご聲あり讚嘆なされたは法身證誠ご云ふて一切諸佛の法身でありて其言に決定必成無上正覺ごは諸佛が法藏菩薩は佛に御成りなさるに違はぬご仰ることちやごある、ソユデ此願満足する爲めに永世の間御苦勞ありて正覺御成就なされたのが此南無阿彌陀佛の六字ちやで衆生の往生は疑ふに及ばぬ、間違ふ氣遣いが無い、故に善導大師は南無阿彌陀佛を御釋なされて此義を以ての故に必ず往生を得ご仰られた、夫故罪の有るのも遠慮するにも及はぬ、善根功德のないことを心配して案するかご思召して蓮如上人は末代無智の御文に必ず彌陀如來はすくいましますへご必の一字を御加へなされた、斯る御謂れが六字の中にある故に本願の御理りを信じたものは、十人は十人ながら往生間違ないご仰るは

阿彌陀如來計りぢやなひ、恒沙塵數の諸佛がよりにて、かゝりて南無阿彌陀佛を信じたものは往生間違へて證據に立て下さるが六字の約束ぢやて罪や障りは遠慮に及ばぬ其機の儘でありながら、彌陀一佛を頼み奉る立處に往生の大事満足なさしめ頂くは偏に他力廻向の御手柄そご喜びく報謝の不行

第卅八回

即言由聞願力等

經言即得釋云必定ご仰るは、釋迦如來が願成就の經文に即得往生住不退轉ご御説きあらせられ、龍樹菩薩は易行品に即時入必定ご仰られた、夫故只今斯く御示しなされたのぢや、さて經に即得ご云へりご仰るごゝて、即の字の意を御釋なさるは如何なる譯けぞご云ふに臨終業成ならば來迎の有無によりて往生の得否が定まる故、若し

惡縁に障へられたならば、往生不定である故夫れに反して平生業成であるから往生間違ひないぞご、善導大師の必得往生の手強きごごを顯はさんが爲めに吾祖は即の字を釋したまひたのである、鎮西では即の字を解すは龍樹菩薩が智度論に即に付て同時即異時即ご仰せられたが、願成就の即得往生の即の字は異時即でありて、やがて極樂へ参りてから、不退になるのぢやて、即字は只今ご云ふごぢやない、やがてご云ふごごであるご、鎮西なごに取る故に御開山は即の字を御釋なされて、即言由聞願力光闡報土眞因決定時尅之極促也ご仰せられたのぢや、早く云へば第十八願成就の經文十句四十字を即の一字に攝め込んで御教へ下されたのぢや、由聞願力ごは聞其名號報土眞因決定するごは、信心歡喜、時尅の極促を光闡するごは

乃至一念の御意でありて、其時尅の極促の場合は彌勒菩薩も、はかり知ることが出来ぬ早やさで、本願を信するなり往生定まり二心なく彌陀一佛をたのみ奉る立處に永の迷の根切をして頂く之れを顯はすのが即の字の御指命ぢや、今一遍云ふと決定と云ふに二つありて一には信心決定二には往生決定である、信心決定とは、たのみ兼ねた彌陀一佛を明かにたのまれたが信心決定未來の行末一つに安心安堵の出来たのが往生決定である、之れを六字に配當するに南無の二字を被りたのが信心決定阿彌陀佛の四字を頂たが往生決定である、願成就の經文では信心決定即得往生住不退轉か往生決定である、處が信心決定と往生決定とは決して隔てのあるのぢやない、夫れは那是と云ふに此彌陀一佛をたのみ奉る心は如何して彌陀一佛をたのみ

のかと云へば如來の御助けの届たまゝが彌陀一佛をたのむので、彌陀をたのんでから往生の定たりを調べるのぢやない彌陀一佛を、たのむ其心が往生決定である、歎異鈔に念佛申さんと思ひ立つ心のおこるとき、攝取不捨の利益に預けしめたまふ、なりとあるは、このことぢや、那是又往生決定と信心決定と隔たりがないのかと云へば全體たのむ心は如來の御助けの届たまゝが、行者の心の中に顯はれた相たである、夫れ故念佛申す間がない、念佛申さんと思ひ立つ心の起りたときか往生定りたのぢや、之れを覺如上人は智識傳持の佛語に歸屬するをこそ自力をすて、他方に歸することもなづけ、また即得往生ともならひはんべれ」と仰せられた、そこで自力をすて、他方に歸することも、云へとは願成就の經文の信心歡喜のこゝろであ

りて二心なく彌陀一佛をたのみ奉る心が自力をすて、他方に歸した
 のちや、そこが即得往生である。私は習ふて居ると覺如上人が仰る
 のちや、自力をすて、他方に歸するは何時か。云へは智識傳持の佛
 語に歸屬するときである、歸屬する。云ふは又の御化導には善智識
 の言の下に歸命の一念發得せば其時を以て娑婆の終り臨終と思ふへ
 し。仰せられてある、善智識の言下で。仰るは本願の理りを善智識
 より聞へて二日も三日も夫れを考へて見て夫れから信心決定する。こ
 云ふのちやない、鐘に撞木の當りた時が鳴るのちや、善智識の言の
 下其場で歸命の一念發得したので其處が往生の定まり場ちや。仰る
 のちや、さすれば信心決定。往生決定。は時に差別があるのちやな
 い、本願の御理り被られた有のまゝ、二心なく彌陀一佛をたのみ奉る

立處に往生一定御助け治定の覺悟になさしめて頂くのである、この
 只今の御化導である先、

第卅九回

本談終了

必言、金剛心成就之貌也。こある思召を取次に及ぶ、ソコテ此金剛心
 成就。こある御言は、先づ一通り申す。こ金剛の信心が出来上た相たを
 必。こ仰るものちや。斯う見ねばならぬ、併しながら言使ひ。云ふ
 ものは大切なことで、常に信心の言には決定。云ふ、言が附くので
 蓮如上人の御文でも信心成就。こは仰られすに、信心決定。こ仰る、こ
 ころが只今は金剛心決定。こ仰られず金剛心成就。こ仰らるゝは、吾々
 に取りては誠に頂き難い。こちやと思ふ、是につきて如何なる思召
 があるのか。云ふことを私に伺ふに、大體金剛心。云ふは同行申も

豫ねて信心のこころをのみ金剛心と仰る様に聽聞して居られようが、此金剛心と云ふことは、此信心が堅いと云ふことで金剛と云ふのちや、金は誠に堅い金で火の中にありても、水の中にありても變らぬのが金剛である故、頂た信心は貪欲の水の中でも瞋恚の火の中に於ても傷む氣遣がない故、金剛の信心と仰るのが善導大師の御化導である、夫を御開山が御相承なされて御化導下さるのちや、處が今一つ金剛と云ふことがある、之は同行中には一寸耳へ入り難へから餘り話たことではないが、今日は序に一寸話して置く之は御開山の信卷に眞知彌勒大士宿等覺金剛心故龍華三會之曉當極無上覺位念佛衆生宿横超金剛心故臨終一念夕超證大般涅槃と仰られた、此金剛心とあるので前の金剛心とは違ふのちや、之れ菩薩方が三大阿僧

祇の間の修行して今度ははいよく佛になること云ふときに、金剛喻三昧と云ふ定に御入りなされる、夫は何の爲めかと云ふに三界の煩惱を斷し盡させられたが、一番後に元品の無明と云ふ煩惱が残りてある、之を斷するときは菩薩の位は佛とは少しも違はない、丁度十四日の月と十五日の月程の違目で、十四日の月は氣を付けて見ると少し欠けてあれど、一寸見たときは十五夜の月と變らぬ如く、金剛喻三昧に入る菩薩は一寸見ると佛に異らぬ機なれど、氣を付けて見ると佛とは少し異りがない、此元品無明がなくなるに佛ちや、ぞこで此煩惱は如何にも小さい頂惱で瑠璃の大地に塵りが一つある程の僅かな煩惱なれども、之を斷する智慧は、それはく大變もない智慧が入るのちや、喩は大きなものを見るには老眼でも見へるが微な物

を見るには極めて結構な眼鏡でなひと見れぬやうなものぢや、其智恵は諸有煩惱を金剛杖で打ち砕く程の智恵でなければ断することが出来ぬ故金剛喩三昧と云ふのぢや、之れを御開山は眞知彌勒大士宿等覺金剛心故等と仰られたナント同行衆大きい話ではあるまじか、しかれば我々は誠に喜ばねばならぬのは、次の御言でありて、念佛、衆生、宿横超、金剛心故臨終一念、夕、超證大般涅槃等と仰られて如何にも廣大なごぢや、吾々が迷に戻らぬと云ふ處は不退、或は正定聚必定と云へども、一夜明れば彌陀の浄土に往生ごげさして頂き彌陀同體の御證りを開くと云ふことは彌勒と異ならぬ、ソコテ只今仰しやるのぢや、トコロが彌勒菩薩は未だ五十六億七千萬年を経ねば佛に御なりなさるごことは出来ぬに、御互の吾々は只今命ち

終るごも彌陀同體の御證りを開かして頂くのぢや、そこを念佛衆生宿横超金剛心故臨終一念、夕、超證大般涅槃と仰らるゝのぢや、爾れば只今必言金剛心成就貌也とあるは、他方回向の信心なれごも金剛とある御言の中には、私が只今本願を信じ下向の道でカツクリ命が終るごも往生間違いないと顯はして下さるのぢや、さすれば吾々は實に喜ばねばならぬ、何時修行した覺へもなく、朝飯前の戒行持つたごのない、私が本願信する一念の立處、往生一つは如來の方より治定と御定めに預るは偏に南無阿彌陀佛の御手柄であるご頂た上は娑婆逗留の其間は王法爲本の掟に叛かぬ様に致し家内睦ましく法義相續大切に致さるゝが肝要、

(完)

歸命字訓信仰談終

明治三十九年九月二十日印刷
 同 年九月廿八日發行

著者 藤谷還由

發行兼印刷者 西村九郎右衛門

京都市下京區下珠數屋町東洞院西入桶町八番戶

東京本郷	森江書店	同	五條	法林館	越前福井	中村六三郎
同	文明堂	同	五條	爲法館	同	酒井安兵衛
大阪心齋橋	橋本德兵衛	越中富山	中田書店	同	江州長濱	平澤潤助
京都西六條	興教書院	同	守川吉兵衛	同	美濃大垣	中村藤平
同	西六條 顯道書院	加賀金澤	近田本店	名古屋	岡安竹次郎	岡安竹次郎
京都東六條	法藏館	同	宇都宮書店	越中高岡	三浦兼助	三浦兼助
同	五條 法文堂	同	俣田太七	學海堂	學海堂	學海堂

大賣所

清澤達英師編

眞宗聲明本

全一冊

正價 金壹圓五拾錢
 小包料 金拾錢

展轉章附 紙質美濃薄葉極上等絹表紙附映入願美本

- 目次 ○伽陀○正信偈眞四句目下等種々○文類正信偈眞四句目下等種々○淨土和讚○高僧和讚○正像末和讚○讚佛偈○早引念佛和讚回向○坂東曲念佛和讚○式間念佛○百遍念佛○舌々短念佛回向○經後念佛回向○路念佛○念佛回向五淘等種々○願生偈○往生禮讚日中偈○漢音阿彌陀經

眞宗聲明本の印刻せらるゝや實に多しと雖も缺點一二に止らす是に於て聲明に於ける泰斗清澤師に乞ひ完全にして而も無缺なる節辭に修正し爰に出版するの榮を得たり此一本を所持せば御本山並に末寺在家を問はず一切の勤行式をなすに掌を指すか如く容易なり請ふ大谷派に流れを汲む一般の諸子一本を購ひ此一派の聲明は高尚優美なるを世間に知らしめ佛祖崇敬及傳導の補助にならしめんことを

渥美契縁師著

●淨土和讃勸信錄

全六冊 正 價金壹圓八拾錢 郵 稅拾五錢

●高僧和讃勸信錄

全四冊 正 價金貳圓 郵 稅拾五錢

●正像末和讃勸信錄

全三冊 正 價金壹圓 郵 稅拾錢

眞に師は淨土和讃より逐次此勸信錄を著はせしに大に大方諸子の賛同を得一歳ならざるに發賣せしこと淨土和讃の第一版は將に盡んとす次で高僧和讃も既に成り是れ亦數月ならざるに第二版も半を過ぎたり次で正像末和讃も拍手喝采場裡に脱稿を得たり是れ本館の幸福のみならず眞宗繁昌の至す所と深く欣舞に堪わさるなり布教に従事せらるる諸君振ふて之を購讀し以て材料とせらるるならば教人信の實を擧ぐるに必ず近からん諸賢も知らるる如く著言は現代の法傑にして最も布教に長せらるること今更喋々を待たず當時専ら布教に心注ぎ其繁忙嘗ふるに者なし然るに寸暇なきに寸暇をさき此大著述を爲す所以は眞宗に於て金科玉條たる和讃にして逐次説教せられたる書なきを大に愛ひ出精の力を盡し此大良書を編出するに至れり殊に此書の體質は先輩の學轍を確守を嶄新なる譬喩因縁を挿入し俗諦の訓誡をも懇切に錯綜し異解異安心に沈淪せざらんことに勤む其巧妙なること言語に絶せり故に布教初學者の好撰範たるは勿論老練者と雖も好材料たること此書に過ぐべからず乞ふ世にありふれたる説教本と同視し瓦礫と混する勿れ

發行所

京都市東六條下珠數屋町

西村護法館

